

Monto Kaj Neĝo
Monata Organo de Monta kaj Neĝa Clubo.

山と雪

第 八 號



札幌 山と雪の會 發行

昭和六年九月發行

第八號 目次



瑞西山岳會の登山小屋 (承前)

三月の天狗岳と屏風岳

第二回 スキー大會距離競技及其の成績

全道中等學校

Haus Morgenthaler の事

空沼附近のスキー生活

全日本スキー選手權大會に臨みて

レーキプラシツドのジャムプ臺

◆ 雜 錄

早春の羅白岳・購入並に寄贈圖書雜誌

寫 眞

ハンスモルゲンターレル

屏 風 岳

漁岳連峰小景

羅白市街より見たる羅白岳

圖 版

Kronenhütte am Pauckenstock, Uri Sektion Gotthard

屏風岳・天狗岳への登行概念圖

グスタフ・クルツク著
山崎 春雄譯

鈴木 重雄

高 橋 昂

井 田 清

宇 都 宮 高

武 野 芳 枝譯

(一)

(三)

(三)

(三)

(三)

(三)

(四)

Hans Morgenthaler の顔

Gesellschaft alpiner Bücherfreunde E. V. より送られしものなるも切りぬきなる爲書家の名は失念せり。

私は彼のこの顔を見て居ると彼が Siam から歸つて来て、何年かを歐洲で過して居る間に、ふと又タバコとアルコールと、孤獨に心をいためた彼の事を思ひ出す。

彼の周圍で心配して居る友人、知人

米國へ行つて金儲をしろといふ人

結婚をしろといふ友人

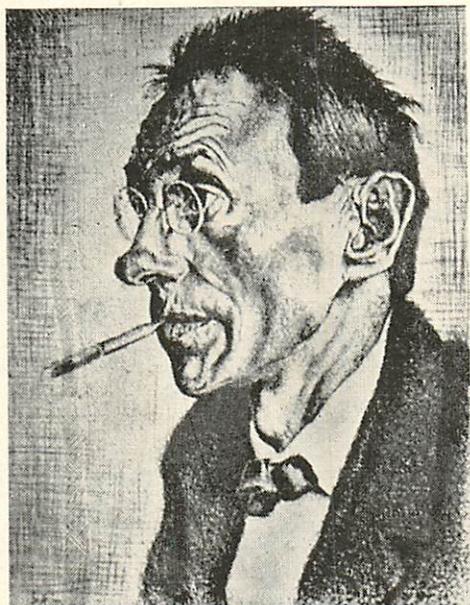
そんな裡で、彼は心を暗くし乍ら併し「感謝」の情を心深く守つて居た彼の顔を想ふ。

「お前だけが、私の愛する友よ

お前だけが私を解つてくれ、そうしてお前だけが私にはほんとうのなぐさめなのだ！」

さう言つて居る彼の心を、この顔を見て居ると思ひ出したのですが

それは、何んでもない、それだけの事かもしれません！



瑞西山岳會の登山小屋

(承前)

グスターフ・クルツク 著
山崎春雄 譯

八、クレインテンヒユツテ

(ゴットハルド支部)

Die Krönten-Hütte der Sektion gothard S. A. C.
am Paukenstock, Eisfeldertal, Uri.

位置、到達路及び登攀

クレインテンヒユツテは一九二二年の再築に係り、パウケンストックの北西、一九四〇米の高さに在る。

小屋はエルストフエルドより歩道により四時間半にて到達することが出来る。小屋よりの登攀はパウケンストックよりクレインテン・スバンオルト・シユロスベルグの連峯を主とする。峠越えとしてはゴルネレンタール・マイエンタール及びエンゲルベルグに越えることが出来る。

建築の歴史

四林湖の南端ウルネルゼーの岸を離れ平坦なるロイスの谷底を南に向つて走るゴットハルド線の旅客は西側の急峻なる

岩壁の上に緑草の谷を前にして壯大なる石灰岩の岩壁と氷河とを遙に仰ぎ視るであらう。是れ即ちエルストフェルド谿谷と其の奥なるシユロスベルグ・シユロスベルグリユツケ及び其後にスバンオルトの岩峰であつてウリの谿谷中最も美なるものゝ一と云はれて居る。然も到達は最も容易に勝れたる登攀の豊富なる、茲に登高の若者は其の最初の三千米頂を求め老練の人も又この谿谷と山頂との美に不斷の誘惑を感じるのである。

最初のクレンテンヒユツテの建設は一八九〇年に行はれ、一八五〇フランの經費を要した。小なる丸太作りとして石積の基礎の上に建てられ、間口三三四米、奥行七三三米の大きさであつた。一九一二年小屋の擴張、即ち同じ大きさの増しをなした。支部會員の協力により増築の經費は五千フランにて足りた。此小屋は一九二〇年雪崩によりて破壊せられ、應急工事により一時の急を凌ぐ事を得るも新築の急は目前に迫つたのである。其際改築の方針としては姑息の手段を捨て全然新なる地點に新しく計畫することが必要と認められたのである。

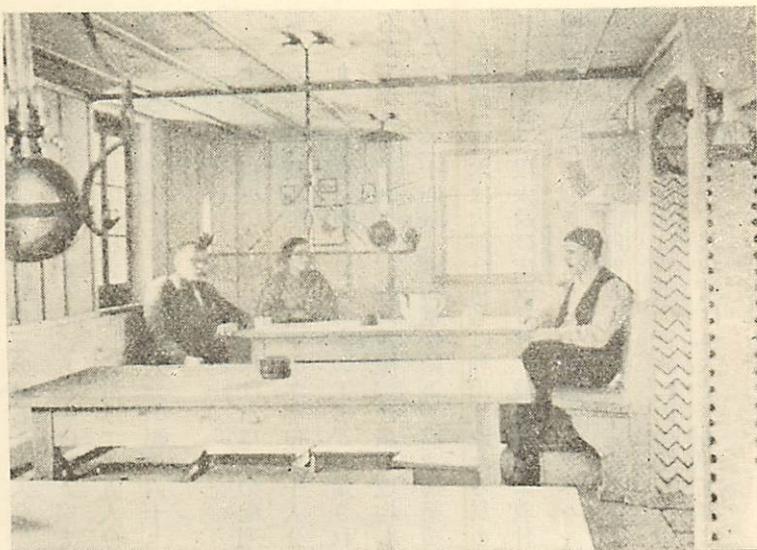
予はゴットハルド支部の依頼により喜んで新小屋の計畫及び建設の實施を擔當することを承諾した。又建築家ハインリヒ・ブレイムも亦嘗てアルベルト・ハイムヒユツテ及びドームヒユツテに於けると同様喜んで予のクレンテンヒユツテ計畫に對し、内外最も素朴なる形式に於て藝術的完成を與ふることを努めたのである。一九二〇年九月十八日ゴットハルド支部は新築を決議し、同年十一月シユウイツの代表委員會は是に對し三万二千フランの補助を承認した。其年秋既にゴットハルド支部會員はオーベルゼー湖畔に新築の爲めの砂の準備を始めたのである。

設計、構造及び工事の實施

設計に當つて予の努力したる點は出来る限り坪数を少くしてしかも五十人分の寢床と相當の居間とを配置することにあつた。解決は屋根裏を利用して二重に寢床を設備するの外なかつた。

屋根裏に取付けられたる十五人分の寢床は安易に昇降し得る様に注意された。舊クレンテンヒユツテの屋根勾配と全然同一なる普通の登山小屋の夫れよりは稍急なる屋根の傾斜により階上に於て奥行九米、間口六米に過ぎざる場所に於て

四十人分の寢床と充分なる餘地とを配置することが出来た。



小屋は二階建切妻作り、外徑にて長さ一〇・三米、幅七・三米である。種々の色を雜えたる粗面の角閃片岩を積上げたる石壁はセメントモルタルにて強固に固められ、地盤の岩石より屹立して居る。腰掛及び石卓を有する石垣がテレースを繞つて小尾と周圍とに階調を與へる。屋根桁は褐色に塗られ、木造の軒蛇腹なしに僅かに突出せる粗面の石帯に接續する。

窓の雨戸はウリの色章黒黄二色の後光 (Gellimmi) が塗られた。窓、扉、紋章及び屋根軒も強い快き色を以て塗られてある。小屋は三部に分れ、二本の太き柱が内部及び屋根の構造を支えて居る。小屋の内部全面、壁、天井及び屋根内面すべて板張りとし目板を打つてある。小屋の入口は南西向きの長正面の中央である。訪者は玄関より防風扉を排して小屋の中心に入る。後は廣き炊事室である。玄関の左には夏期の間不斷滞在する小屋番専用の寢床が置かれてある。右側は階上に導く階段となつてゐる。北西切妻面に沿ひ、シユロスベルグ連峰及びオイレンゼーへの絶佳なる眺望に面して三十人の坐席を配置せる居間がある。反對南東側の切妻面に沿ては炊事場及び其他の部と丸木積の壁にて隔離されたる室として仕切られ五人宛の寢床の二列と坐席及び卓子、並びに小形の炊事ストーブが之に配屬して居る。此の室は冬期の使用に向つて特に考慮

されたものである。

階上は北東側の壁に沿うて三分せる十五人分の寢床と反対側の壁に沿へる五人分宛の寢床二個とが設けらる。此の側の寢室は夫れノ戸締りがなし得られ一は婦人室として一は山岳會員専用として保留することを得るのである。更に階上寢床の上部に小屋の屋根裏の全長に沿うて十五人分の寢床が設けられ中央廊下より容易に昇降することが出来る。總計小屋は五十人分の寢床を有し、各一人分の幅員六十センチを充てゝある。場合によりては百人の宿泊者をも收容することは困難でないのである。

階上及び屋根裏の開放しの寢床は小屋材の配列によりAよりFに至る六區劃に分たれ、小屋番が宿泊者に對し寢床を配當するに特に便利である。階下の冬部屋（十人分）及び階上南側の室（五人分）は山岳會員専用として保留されて居る。

一九二一年六月新しき山の家の工事が開始された。新小屋の位置は舊小屋より三百米を隔てゝ決定された。六月は準備石割、器具、セメント、砂の運搬、現場の地均し等に費された。七月二日には礎石が置かれ、翌日は小屋の標高が實測された。七月二十四日には石壁は階下の高さ迄築造され、八月初旬、屋根小屋組の上棟、八月十三日屋根桎葺完成。

舊小屋の材木は大部分新築に利用されたる爲め舊小屋に宿泊したる職人は八月十一日以来新小屋に移轉した。八月十九日、窓取附、根太及び床板打付、最上部寢床取付、八月二十八日石工殆ど完成。指物工の最中、塗工に就ての諸注意、周囲の整理の指定、チューリヒの彫刻家カツベルル此月より入口正面横の壁面に紋章及び銘の彫刻を開始す。九月十二日より十七日に至る間に内外の工事共全く完成小屋工事全体礎石定置よりして十一週の短時日を以て終了したのである。

ゴットハルト支部は新築の實施に向つて五人の建築委員を選出し支部長、建築家パウマンは其の首腦として獻身的の努力を以て事に當り、其功績は多大である。工事はアルトルフの建築會社ベルナートの請負により各當事者の熱誠なる努力によりすべて満足なる出來榮を示した。

一九二一年九月二十四五日、美なる秋晴の日に小屋の獻堂式が舉行された。三百人に餘る來會者が日曜日の午前新し

い小屋を圍み、新なる建築の完成に對して心からの喜悅を感じた。

新クレンテンヒユツテの建築費は約四万五千フランを要した。中央會計よりは三万二千フランの比較的多額の補助を得たりとは云へゴットハルド支部自身の負擔も亦大なるものがある。故に予に取てはウト支部が予の請願を容れて特別支出として八百フランの補助を議決したるは大なる喜びであつた。ゴットハルド支部は建築資金の負債の荷を喜んで引受けたのである。

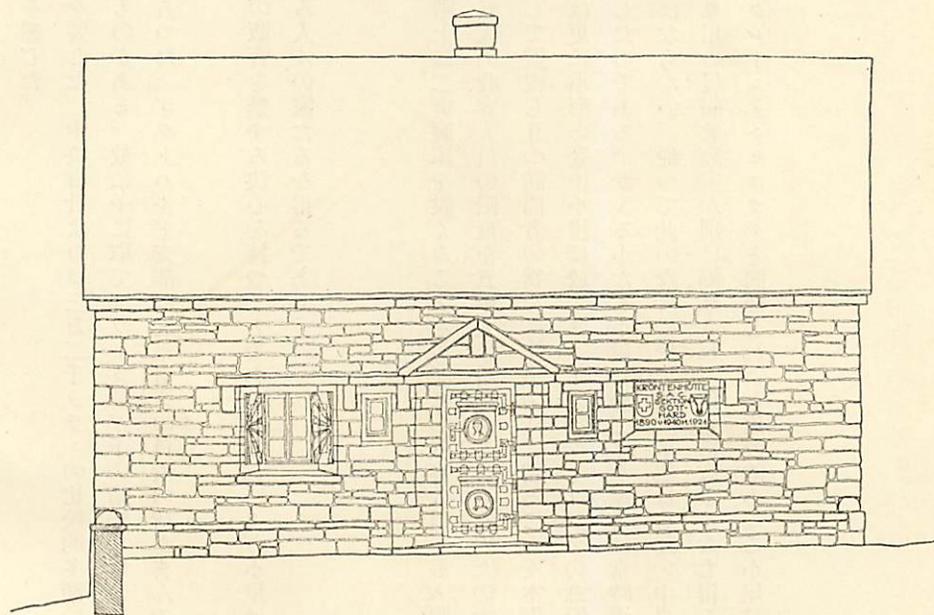
特筆すべきはゴットハルド支部が此小屋に於て飲食物の販賣を禁ずる決心を持つことである。これにより小屋は宴會場たることを免れ、専ら山岳の美を求め其内に生きんとする人々の家たるを得るであらう。

九、一九二一年登山小屋設計

クレンテンヒユツテの特性は屋根の勾配を急にして階上に二重寢床を設けることを可能にし收容人員を最大限度に増すことにあつた。これにより同一坪数の小屋に於て三十五人の收容人員の限度を五十人に増加することを得たのである。

クレンテンヒユツテは夏秋の候、不斷小屋番が滞在して監視し且つ訪問者の爲めに炊事の任に當ることを本則としたる故に設計上居間及び炊事場を隔離したのであるが、予は更に小形の登山小屋に於てクレンテンヒユツテの意匠を應用し登山者に向つて快適なる宿泊所を提供することを考案したのである。かゝる小なる小屋に於ては小屋番は常時滞在することなく登山者自身炊事をなすこととして設計せられねばならない。従つて此の設計に於ては炊事場は居間の中央に置かれ、小なる寢床が之に附屬して居る。階上には山岳會員専用の居間兼寢室が別に隔離され、獨立に炊事をなし得る様にストーブを配置することとした。屋根裏利用の二重寢床はクレンテンヒユツテと同様これより比較的的小なる小屋に總計三十人の宿泊者を收容することが出来る。

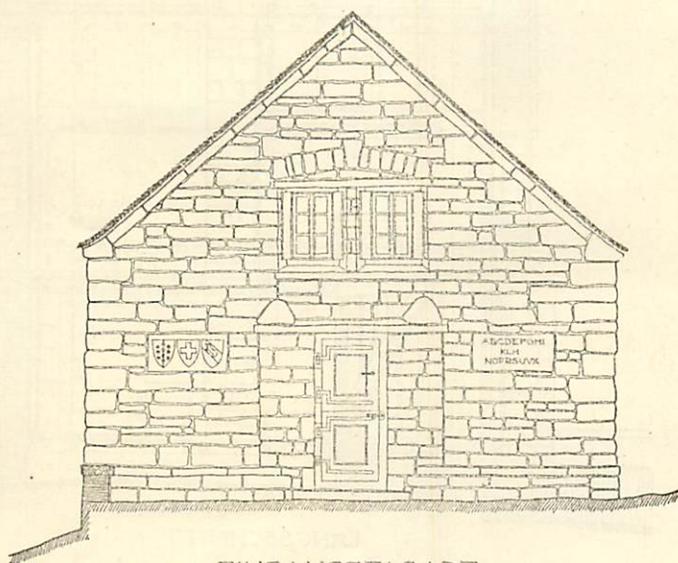
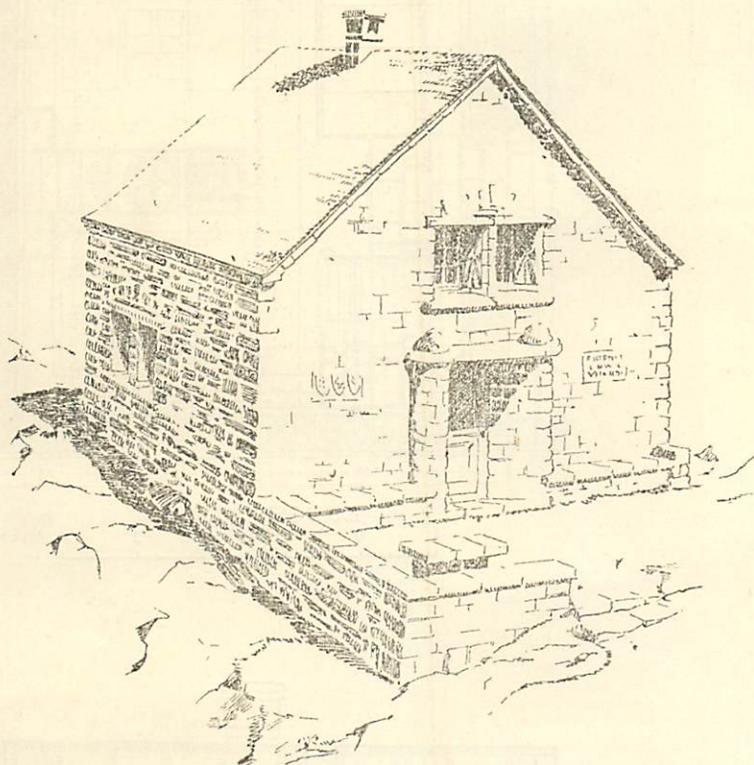
KRÖNTENHÜTTE
AM PAUKENSTOCK · URI ·
SEKTION GOTTHARD · S · A · C ·
1940 M Ü. M.
36 TISCH- u 50 PRITSCHENPLÄTZE .



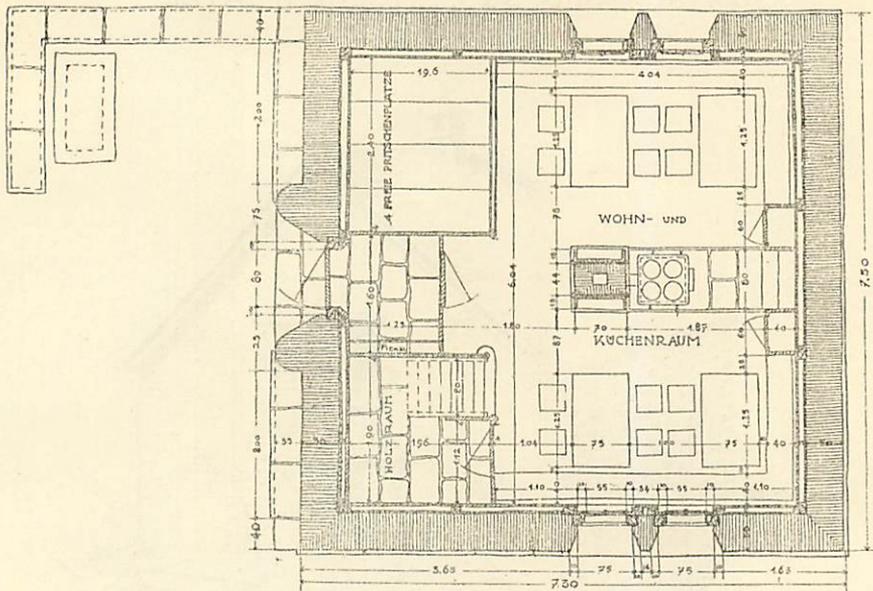
SÜDWESTFACADE

PROJEKT GUSTAV KRUCK 1921

30 TISCH-UND 30 PRITSCHENPLATZE

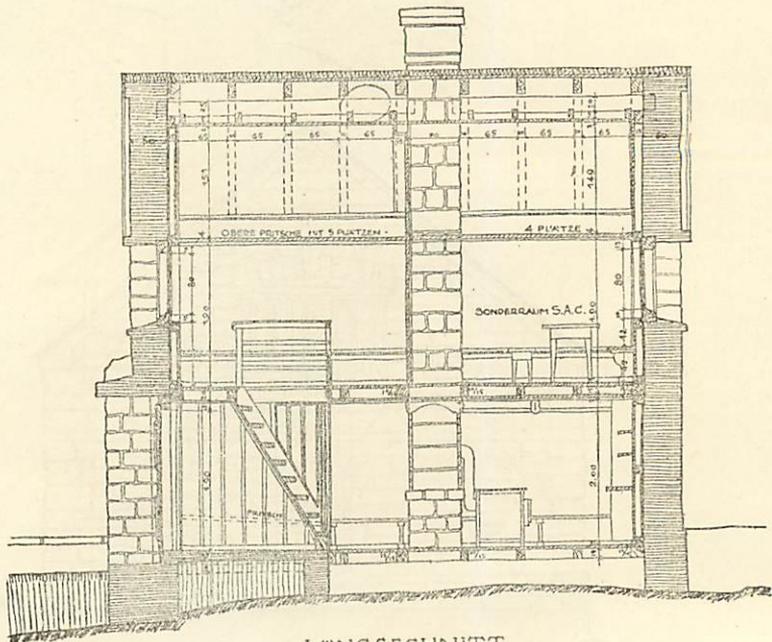


EINGANGSFACADE



ERDGESCHOSS

1 0 1 2 3 4 METER



LANGSSCHNITT

三月の天狗岳と屏風岳

鈴 木 重 雄

二ヶ月の間國家試験とか云ふ名の下に脂を搾られた頭にも山の姿は消えかゝる處か尙一層と明きりとなつて來る。

丁度酒精中毒患者が眞白な壁に一寸した班點を大きなとてつもない怪物と見える様に試験と云ふ物が濟んだら山に行くぞと獨言しては何處に仕様かと直ぐに次の問題に移り次から次へと山の中の生活、タンネンの中に記されたシュープールの陽に映えて美しく見へる景色等目にちらつく。餘り人の行かない山に行きたい、此は誰しも山に興味を持つ人の一つの共通な特性でもあらう。山の中の本當に靜かな氣分に浸りたいから。北見の屏風岳は如何か未だ恐らく冬には成功して居ない筈だ。學生生活の名残りだ。成功する迄登るぞ。となんだかどうしても行きたくなつて地圖を求めて机の前にはつて始めて試験の方もゆつくりと落ち付い

て受けられた。熱に取付かれてどうにもならなくなつた状態によく似て居る。登山も一つの病氣に入れた方が取扱易いかも知れない。宿泊場の事を早速村役場に紹介した。所が宿屋は勿論なし、造材小屋もない。區長さんからの葉書で自分の家でよければ喜んで宿めるとの事だ。併し上支湧別村に泊つては屏風岳に遠い更に更に地圖に二股と書いてある近所に。農家はないかと區長さんに問合せた。直ぐに返事があり武田傳吉氏宅に泊る様にと云ふ事だ。宿泊場も定つたし天氣さへ當てれば成功疑ひなしだ。

三月廿四日 札幌發午前六時五十九分

小雪 中越着午後二時四十分

一行 宇都宮高 三浦義明 鈴木重雄

北見國と石狩國との國境に立てられてある峠の驛遞と云

へば冬には道もなければ人も通らない様に一寸考へられるが、昔は左様だつだらうが今は石北線のトンネル工事で澤山人も入つて居るだらうし、馬糞も入つて居る事だらう。

春の馬糞で高くなつた道を何時間か過さねばならぬ事を覺悟しては居たが意外にも札幌にしては丁度二月頃の雪だ。

スキーでなければ時間的に不經濟だ。先此處で非常に惠れた様な氣持で、朗かな氣分になる。馴れない肩に重いリュックは徹へる。一時間歩いては休み、汗を出しては又休む。肩がほつとするがリュックを上げるのに又一骨折だ。やつと持上げる位の重さだもの。馬糞道に別れる所に漸く五時に辿り着いた。電燈線と電話線が雪に埋れて頭に届く位だ。鐵道建設のために付けたのだ相だ。山の風致を害する事將に百パーセントではある。一面のタンネンの間に少し切れた眞白な所がきつと夏道でもあらう。ずつと四本の線がつながつて居る。處々にタンネンの少い、少しもブツシユのない外に何も障物のない大ゲレンデが轉つて居る遙山を思はせる様なゲレンデ、ユートピアを思はせるゲレンデ、色々様々である。歸りには充分に享樂出来る事を樂しみに一尺餘りの雪を一步から一步と踏みしめながらスビ

ードを出すべく努力はするが段々とピッチは遅くなる。進むに従つて滑りたいスロープは増す許りだ。幾つかの谷を渡り、急に開けた所に雪にすつかり埋められた眞白な屋根を見付けたのがもう六時少し前だつた。番人が心から燃して呉れるストーブでのびた。雪は相變らず未だ降つて居る番人に天狗岳の様子を聞いても知らない。答は唯チトカニウシ山には時々スキー登山するが、天狗岳のスキー登山はないと云ふだけだ。宿帳には色々な名前が並べてある。殊に各所々に知つた名も見える。なんとなく懐しいものだ。明日の天氣な事を祈りながら床に着いたのが九時だつた。

三月廿五日 雪後晴

六時に起されたが未だねむい。而も雪は未だ降つて居る。もう昨日から降通しだから一尺餘もある。荷物は重いし、天狗岳を超えて上支湧別に下るのだ。困難ではないかと氣づかつて見たが風は幸に少しもない。一時中止説も出たが兎に角行ける所迄行く事にして七時に出發した。直ぐに尾根に取付いて廣い殆んど斜傾の分らない位の尾根を、肩に食込だリュックを小言云ひながら進むが雪は深いし仲々はかど

らない。未だ降つて居る。而し綺麗なタンネンと所々に白樺を混へた林の中を歩くのどもの満更ではない。雪も切れて来た。小降になつて来た。午後から晴れだと急に元氣になつて来る。併し十五分位のラッセルでもう參る。凡そ一時間半も歩くと定つた様に休憩だ。豫定の時間の倍はかゝる筈だ。一〇三八に着く頃から時々太陽が顔を見せるが又直ぐに曇つて了ふ。何處迄行つてもだら／＼の登り下りで所々に瘤がある。全く尾根歩きも雪の深い時はいやな事の一つだ。折角晴れかけて来た空からは又降つて来た。もう今日は一日こんな天氣だらう。吹雪がなければ上々だ。少し傾斜が増して来た。少し登り甲斐が出て来た。一寸手稻の小屋から頂上に登る所の様だがブツシユはない、もつと綺麗な壯嚴な森林だ。二二六七の直ぐ下で晝食とした。十一時だつた。此の近所の森林は物凄く少しも人の手の入らない自然其儘の純林だもの、宇都宮の喜ぶ事喜ぶ事此んな所にもつと早く来て居たら俺の論文も少し違つて居たと云ふが全く變へるとは云はない。森林美學に知識のない僕でさへも唯無性に綺麗だ美しいと云ふだけは分る。此んな所をたへ此處に来なくとも見せてやりたい。寫眞では此の感じ

は恐らく出まい。唯わけなく綺麗だ。うつとりする。雪は段々ひどくなつて来る。風も出て来た。而し木は少し小さくなつて来た。白樺も少し増して来た間もなく頂上だらう。白樺の美しい林の中を幾つかのヂツクザツクを切つて漸く小さな白樺許の所に出た。風は強く當る雪は飛ぶ。かなりひどい。前は少しも見えなくなつて来る。眼鏡は氷り付いて来る。近眼の悲哀である。暫くの間の我慢で何時の間にか平らな岡の様な所に着いた。マグネットを南に取つて一寸一六三五の三角塔に着いた。一時二十五分だ。一六〇〇米もあるのに何の危険もなしにスキー登山が易々と出来る森なるかなである。吹雪にガスで何處も見えない。高低さへも分らない。スキーが滑る方が低いのだらう。再びマグネットを東に取つて降るが少しも前は分らない。唯頼みとするのは磁石一つ。天狗岳と續く尾根は吹さらされてカチカチだ。全くあぶない。漸くにして天狗岳との鞍部に出る。ガスが晴れて来た。所々に青空さへも見えて来た。天狗の岩がヌット目の前に出て来た。三人共喜びながら自信のない寫眞を取る。宇都宮はバッテリーを出して手ごたへがあつたと一人ではしやいで居る。雲足の早い事すばらしい。きつと

からりと晴れる。もう少し待たう。と約三十分も待つたが仲々からりとは晴れて呉れなかつた。此から一寸のアルバイトで岩の東側に出てスキーをぬぎ、天狗岳の頂上に登つた。二時十五分、スキー登山では吾等が始めてだとか云ふ事だ。屏風岳の頂上は密雲に包まれて姿を見せないが、下の方の尾根と云ふ尾根は猛烈に滑り登れ相もない。而も特有な密林は丁度遠くから見るとピロードでも敷きつめた様な暖く軟い感じさへ與へる。暫し地圖とにらめつこだ。二股と地圖にある所から澤を登り尾根に出る事に評議一決。

此の調子ならば一六〇〇米以上もスキーで行けるらしい。次第々々に屏風岳の上が見えては来るが、頂上は仲々出ない。待ち兼ねて天狗岳から南に走つて居る尾根を降る。充分にスキー術を享樂する。凡そ百五十米も降ると一寸した瘤がある。此所迄は粗林だ。瘤の脇を等高點線に周つて東に出ると廣い尾根に出る。タンネン許りで飾られた晝尚暗い位。粉雪の一尺傾斜は二十五度前後、氣持ちよく滑るがステムクリスチャニヤも二つ三つ位しか續かない。荷物が輕ければとしみじ思はされる。然しブツシユはない全く好い處だ。一帯に將來のあるスキー場とならう。何處の邊

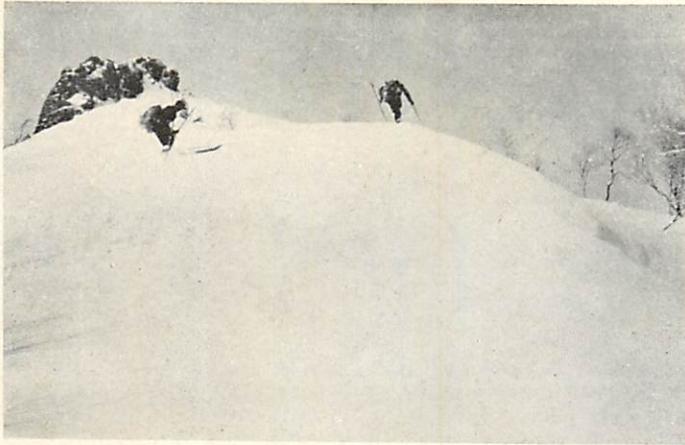
を降つて居るかは密林で皆目分らない。所々に大きな倒木がある。猛烈な風が吹くらしい。同じ様な林の中を凡そ一時間も降つたらう。少しゆるやかな所に出た益々倒木が多くなる。一寸開けた所に出たらもうクラストだ。然し支湧別岳のピークがキツ立つて見える。屏風の物凄くやせた尾根も見える。宇都宮は得意のバチーに餘念がない。間もなくシユプールの跡が見えた。もう農家も近い事が分る。雪が少し重くなつて来る。ブツシユがひどくなる。急に開けた開墾した許りの雪の上に三尺位出た大きな木の切跡が澤山ある。所々に煙が見える。愈々上支湧別部落の上流の方に着いた。今夜の宿とする武田氏宅に荷物を置いたのが五時だつた。随分とひどいアルバイトだつた。武田氏宅では喜んで吾等を迎へて呉れて、ストーヴをどん／＼と燃して熱くて困る位だつた。吾等の荷物を見て皆驚く。此んな重い物でよく山を降れると。心からの食事を食べて天氣を願ひながら床に着いたのが九時だつた。

三月廿六日(木) 晴後小雪

目覺むれば一片の雪も見えない。天氣には全く恵まれて居ると手早く仕度をと／＼のへて記念に宇都宮が農家から見

える、屏風岳をバナーに納め、次いで農家一家の人々の寫眞を取つて七時に出發した。武田氏の子供二人、尋常小學校今年卒業と六年生が吾々について来る。三〇分許り開墾した許りの畑を通り次いでタンネン許りの密林に入った。密林の合間々々から澤の様子を見るのに大分苦心したが二股に着いたのが八時だつた。一寸休んで二股から南に入つて居る澤を度々渡りながら流に沿つて約四〇分許り溯る。早く尾根に取着かないと急で取着けぬ恐れあるので取着いた。猛烈なブツシユ、此にシャクナゲがある。倒木が非常に澤山で超えるのがひどい。一寸粗開した所に出た時漸く北西に當つて一寸烏帽子の形した山が見える。一三二五だらう。子供二人を歸した。丁度十時だつた。地圖ではかなり廣い尾根が而も傾斜も緩かであるが實際では大變な違ひひどく瘠せた、地圖に出て居る傾斜とは想像だに出来ない程急で、而も所々に岩があつて、ずつと迂廻せねば通れない位である。地圖には東側が西側より緩やかに出て居るが全く反對で、又瘤も地圖とは全く違つて居る。地圖に出てない二〇米以上のものがかなり澤山と云つても三つ許りだけがあつた。ブツシユとシャクナゲ、此に倒木に惱まれ時間

は遠慮なく經過するがサツパリ進まない。岩に出會つては五〇米も降る事を餘儀なくされ、粗開した所から地圖に四四四と書かれて居る武利岳の方から西に流れて居る尾根を遠くに見るにつけ嗚呼と思つた事も一度や二度でなかつた。午後二時迄も頑張りに頑張つたが一三一〇と書かれて居る所にさへ達せない。歸りにも相當時間もかゝるし、今日は到底頂上に行けないから明日又やり直す事にして引返し、明日は澤を登れるだけ登る事にした。此の頃から段々と曇つて雪が降り出した。コツヘルを出して紅茶でも飲むべく用意した。突然人聲がしたので三人共に驚いた。武田氏の弟二人と小供と三人だつた。此處で焚火し、紅茶のみ、札幌から持參のアツプルバイを食つて今日の失敗を自から慰めた。明日のラツセル助けにもと直ぐに西に降つて澤を降る事に決め、降り始めたのが三時だつた。澤に入ると雪が深くて降りもラツセル同様で少しも滑らないが後から行くとも猛烈なスピードが出る。少し風も出て來た。明日の天氣が氣になる。然し澤はかなり長く明日のラツセルを思ひ時間の食ふのも我慢して登るに都合よい様にと降つた。二股迄に二時間餘も費して六時半に武田氏宅に到着し



屏 風 岳

鈴 木 重 雄

た。もう暗くなり、今日のアルバイトに疲れ切つて早速ストーヴを圍み、失敗を残念がりながら靴を取つた。武田氏は今か今かと十一時頃から一時半頃迄も屏風の頂上を眺めたとか、全く恥しい思と無念とに明日こそはと誓つても、其處に一抹の暗影がないでもなかつた。今日のブツシユと地圖の當にならないのを知つてからは。然し武田一家の心からのもてなしに吾々の心の疲を如何なに癒した事だらう五工門風呂にも入れて貰つた。外はひどい風だ。明日は吹雪か心配しながら九時に床に入り込む。風の音で仲々眠れない。

三月廿七日(金) 曇後晴

心配した風も雪もない、唯曇りだ。天氣は如何でもなれと半ば捨鉢氣味に六時十五分に出發した。二股着七時十分第一合流着八時十五分。第二合流着八時五十分、前日のラツセルで時間の經濟な事甚しい。此處から昨日の降つた所より一本西の澤に入つて新しくラツセルした。第三合流着九時二十五分。此の邊に地圖に出てないかなり大きな澤が一本入つて居る。更に南に澤を取り第四の合流點に九時四〇分に着いた。此の澤を登りつめる事に一決して一寸休

憩した。雪はかなり深い粉雪だ。西側は廣い尾根となつて居る。此處も地圖とはかなり違つて居る。地圖では瘡根となつて居るが全く廣い尾根なので、尾根に登つた方が雪も少ない様だし、時間も經濟的なので尾根に取つき頑張り出した。青空が見えて來た。風は朝からない。此は晴れるぞと一樣に輝しい顔になつて來た。十一時半にはもう殆んど尾根の大部緩くなつて開けた所に着いて晝食を取る。昨日の奮闘した瘡尾根が東に見える。全くひどい、よくもあれ迄昨日頑張つたと感心する許りだ。其に比べて今日の尾根はブツシユはない、倒木はない、全く恵れて居る。もう成功した様な氣持で晝食も殊に好い様だ。十五分も休んで出發。瘤の上は十二時、此處から屏風岳の頂上がよく見える。地圖ではとても登れ相にない程急に出て居る所が割に緩かに眞白く見える。屏風岳の二百米の所から東に出て居る尾根の二つ目の瘤の鞍部から西北に出て居る尾根だ。あれを登らうと一決して、瘤から南に走つて居る尾根を一先づ二百米許り澤迄降つた。眞白に見えたスロープを元氣一杯で登り始めた。此邊は雪は一尺位あつたが割にラツセルも樂に出來て、段々とタンネンも少くなり、大きさも

減じて、白樺も所々に混ちつて来た。元氣も加つて来た。屏風から出て居る尾根へ尾根へと努力を續ける事二時間だった。武利岳武華岳が東に、石狩岳ユニ石狩岳の連山が雪に包まれて南の方に見える。北の方には白く光に映えて上支湧別の農家が所々に散存して居る。二股も見える支湧別岳のとがったピークも見える。天狗岳も見える西には屏風岳が眞白な未だ一度も汚された事のない肌で吾々を待つて居る。流石に此處は寒い。雪も硬くなつて居る。スキーデボットとしてシユタイグアイゼンに換へた。一步々とアイゼンを頂上へ頂上へと踏んでは行くが、所々に昨日の風で吹溜りが出来て腰迄もぬかる。疲れに疲れてもいゝ氣持だ。一時間の努力で立派な三角塔の下に立ち得た。四本の丸太で組んだ三角塔で、未だ立てゝから間もないだらう。風が少しあるだけで寒さが餘りひどくない。西には大雪山が雲に包れながらも姿を見せるし、ニセコウシユツもよく見える。頂上で休んで食事の出来る位だ遂に吾々は目的を達した餘り天氣いゝので一時間ものびた。四時頂上出發。スキーデボット着四時半、スキーに換へ下りは實に愉快々々、雪はよし、スロープはよし、唯悲しいかな足が仲々云

ふ事をきかぬ事だ。五時に瘤着、此處からも尾根を享受しながら降り、第四合流點五時二十分着、澤に落込まぬ様にと用心しながらも馬力をかけたが遂に二股に未だ遠い第二合流點で日は暮れた。月が時々照すが深い澤だけに暗い併しシユプールの跡位は分るが仲々スピードは出ない。武田氏宅に着いたのが七時四〇分だった。餘り遅いので迎へに出かけねばならぬと云つて居た所だった。直ぐに荷物を作つて一里許り下の區長さんの家へと急いだ。區長さんの家迄の判らない夜道を、月に教へられながらたどり着いた約一時間も重い荷物を疲れた肩に疲れた足で運ぶのは並大抵でなかつたが約束した日より一日遅れたので頑張つたわけだ。

温い御飯を御馳走になつたのが九時半過ぎだった。餘り疲れて腹がすぎ過ぎたためか食へないが腹は未だすいて居る。でも今日の成功に酔つては居たが、豫定の支湧別岳は後日に割愛して明日は峠迄行けばよい事にして床に着く。

三月廿八日(土) 快晴

目覺ればすつかり晴切つて居る。床の中から支湧別岳が直ぐ近くに姿を見せて居る。登りたい、併し体の節々がい

たむ、未だ肩がバラバラに離れてつかない様な気がする。昨日の疲労と今日の行程の樂な事のために漸く床を出たのが八時、山の中としては出来るだけの御馳走をして呉れたらしい。九時に區長一家の見送りを受けて出發した。食料も無くなりかけて軽くなつた筈のリユツクも相當に肩にこたへる。昨日登つた屏風岳が南にその王座を占めて居る。北西にはチトカニウシが眞白な頂上を尾根から面を出し、西には天狗岳も頂きの岩を見せて居る。丁度峠はあの邊だと話合ひながらほんの僅か許りの降り道をのんびりと歩くが矢張り段々と周りが移り變るから進んでは居るのだ。其程單調な廣い原野だ。小一時間許りも原野を通つて天狗澤に出るべく地圖に支湧別原野と記してある所の澤を登り始めた。丁度妙齡の娘さんを連れた婆さんが通つたので天狗澤は此の道を行けば行きますねと駄目を押すと、さあ大變聞きもしない事を話すは話すは、全く降參だ仲々中心點に入らずに、最後にさうです。と唯一言さうですと聞きたかつたのだが。一寸廿分許りの登りではあつたが餘り好天氣なので汗はでる、すつかりのびて了つた。もう歩くよりも休んだ時間の方が多い様だ。クラストになつて居る道を十分

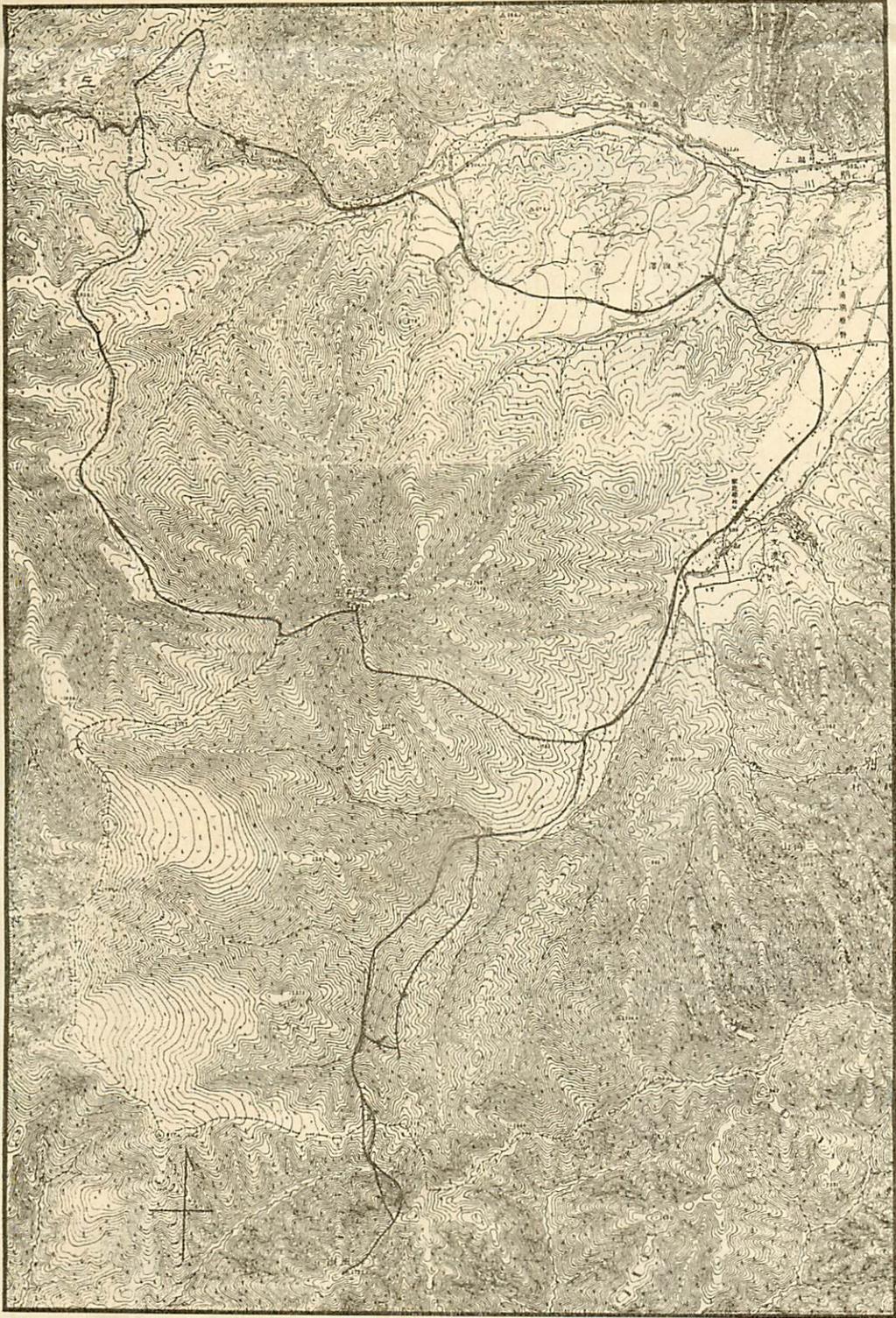
も降つて天狗澤に出た。地圖に小學校の記が出て居るから相當な家かと思つたが仲々見付からない。暫く行くと教授場だ。恐らく先生も小使も兼任だらう。小學校を過ぎて暫く行くと猛烈に廣い平原だ。もう十一時だ。晝食にしようもう食ふ事と休む事が唯一の樂しみ。コツヘルを出し、のんびりと食事を取る。宇都宮が裸になる程の暑さだもの、此處からは支湧別岳は殊によく見える。見る度毎に残念だ尖つたピーク、登れなかつたから尙よく見えるのかも知れぬ。三浦に是非登る様にと二人して勵した。漫談しながら一時間半も休んで出發。石北峠から白瀧に通つて居る近路に出たのが二時頃。處々に鐵道の建設の小屋がある。近路を進む事一時間許り、餘り天氣よいからチトカニウシの登れる所迄行く事にした。併し段々と体の疲労は増して來るが口では誰もいやとは云はない。地圖に七二・六米とある、北の澤の入口に三時に着く。此處から鐵道のレールの上に屋根をかけた上を通つて澤に入つた。時々雷でも鳴る様な音がする。峠のトンネルから岩石を運ぶ電車の音だらう。可なり廣い澤ではあるが兩側は急で所々に雪崩れの跡がある。二時間位登るが澤は仲々つきない。もう五時

だ。到底チトカニウシは駄目だから尾根に出る事にして尾根に登つた所がもう一寸で澤もつきる所だつた。此處から丁度チトカニウシは高さにして四〇〇米許りしかなかつたもう一時間半も時間あつたら登れたのに初めから登る積りだつたら山一つの落し物はなかつたが致方ない。尾根にはシユブルがついて居る。南西へと尾根をたどるが、中にとけた雪が凍つて、クラストだ。滑る／＼スピードは出る。スウィングは出来ない。荷物は重い。後に引張られる恐しい事ひどい。シユブルの側に北建山岳スキー部一行と書かれてある。旭川の建設事務所の人達だらう。今日は驛遮は賑だと一寸氣を悪くしながら降る。又雪もちらく降つて来た暗くもなつて来た。約卅分も降つて電話線を横切つて峠の驛遮に着いた。案外静かだ。誰も居ない。昨日泊つて今日歸つたとの事。今日も又一晩静かなさびしい山の一夜の夢を結べる事を喜んだ。明日はもう札幌だと話し合ひながらストーブを囲みながら最後迄宇都宮が背負つた、千秋庵のつぶれた饅頭に満腹した。雪は猛烈に降つて居る。風はない。明朝迄五六寸で止めば愉快に遊べるかと話しながら床に着く。九時半だ。

三月廿九日 吹雪

七時起床心配して居た雪は豫定よりも一尺も多い。更に吹雪だ。全く面食つた。下手したら十時十分の汽車に間に合はぬかも知れない。七時四分に出發したが下りもラツセル同様遊びながら降る積りの所も急ぎながら降るが滑らない。時間はどん／＼経つ。一時間も費して鐵道工事で馬橋の通る所に出たが、當にして居た馬橋の通つた跡もない。唯スキーで通つた跡許り、それでもラツセルよりはまだ併し間もなく此にも追付いたが彼等は鐵道の連中で道路沿ひでなく鐵道線路の視察らしい。餘儀なくラツセル三人で猛烈に頑張つたが雪は深くて捗らない、遂に中越近くなつて時間が来た、仕方なくゆ／＼と歩む。中越に着いた時は十時卅分、廿分遅くれた許りに次の汽車は午後二時十五分だ。五時間もある待合に入り込んだ。待合では土地の人に幾ら體育のためとは云へ随分物好きな事だと笑はれた。成程左様にも考へられ様。久方ぶりで北海タイムスを見た。卒業生の名が見える。俺も愈々卒業したか。もう一生こんな愉快にのんきに遊べる事もないかと思ふと此許りが悲しい。三浦は未だ此からだ。うんと山に行くがよいと二人に云はれてははにかんだ。

(四月十六日)



屏風岳・天狗岳登路圖

北海タイムス社主催

第二回全道中等學校スキー大會

——距離競技及其成績——

高橋 昂

若き選手の多數の参加を見るので、全道スキーフアンの感興の一つである第二回全道中等學校スキー競技大會は二月十五日札幌スキー聯盟後援のもとに左記プログラムに順ひて盛大に舉行された。

午前八時 選手入場式

午前九時 十三籽距離競技

飛躍競技

午後一時三〇分 三十二籽リレー

當日の参加校は十九校と云ふ多數を見せ、其の各校の内容の充實してゐる點に於ては名こそ全道大會と稱するもの

▲競技者の素質や競技組織の内容に於ては全日本……の文字を冠してもよい程の競技會であつた。飛躍競技に就いては廣田君の稿に依ることとして受持の距離競技に就いての感想を記してゆきたいと思ふ。

長距離競技に就いて前回の距離競走の距離は十八籽と三籽四人各一周の三十二籽リレーの二種であつたが、此の十八籽と云ふ距離が何を基準として生れたものであるかと云ふに、國際競技規則に依つてゐる全日本スキー聯盟の競技規定に準じたものであらうけれども、十八籽と云ふ距離は發育の盛りにある中等學生の競技としては極めて無理であ

ると云ふことは、スキーの先輩であるノールウエーの永い年月の醫師と當事者の經驗からして二十才以下の選手の長距離競技の参加を嚴禁されてゐるのを見れば明かである。

そのために此の國に於ては此等二十才以下の少年のために又シーズンの頭初に於いての競技會にあつては、選手の身體の練習が充分出來てないと云ふ理由からして世界のナンバーワングレートムスブラーデンにしても四軒コースを二十七分から八分で走る様な、極めて變化に富んだ短距離競技會が採用されて居るのである。

以上の様な理由からして Knut Olson 君の助力を得て十三軒の走路を決定したが、別圖の如く初めから終りまで今までに一度も使用されたことのない處ばかり通したために、舊來の走路から全くかけ離れて面白さや變化の多い點に於て満足に近いものであつたと云ふてもよい。(當初に於ては十軒位のものを作りたいた考へであつたけれども周圍の關係から十三軒となることを餘儀なくされた。

前記の如く走路があまりにも意表に出でてあつたために土地兒の札幌の學校の方々にも、又二三月前にやつて來た地方の學校の方々にも、一齊に公平が保ち得たばかりでな

く、走路員(檜松クラブ)の献身的努力と絶好な前夜の降雪と、晴天無風とに恵ぐまれて、六十六名の選手の何れもが殆んど公平であつたと云ふことも特筆すべきであつた。

標示旗の用ひ方に就いて

標示旗は明るい赤色、布地は出來得る限り薄いのを用ひたが薄いのは太陽の光を射してとかく赤色の標示旗が黒色がちに見ゆることを全く防ぎ得たのである。加ふるに巾一寸長さ二尺二寸の布を三點を結ぶ一直線の見通しによつて毎二十米位に附せられた鮮明さは選手をして何等の不安を生ぜしめることなく走らせることを得た様である。

關門の位置に就いて

關門は重要地點に定つてゐるものとかくどの競技會に於ても走路主任や係長の希望する地點に關門員が位置を占めてゐてくれた例が少ないが、今年新たに競技前日標示旗を付するときに、關門員の位置に關門標を附しておき、競技當日の早朝に關門員に走路を傳つて其の立札まで行つて貰ふことによつて、主任が巡回するまでもなく其の希望する地點に就き得たのであるが、此れは一見つまらない事の様であるけれども、競技司會者にとつて貴重な凡例であつ

た。

選手に就いて

選手の技術は各地方とも昨年と見違える位進歩を示して各技術を各個に見るならば地方的の存在を示さなくなつたと云ふてもよい位になつて來た、けれども未だ一技術と一技術との連結に於て圓滑を欠くのきらひがある。

わけても走法として目についたことは地形利用の不充分なこと、その一例として登り平地に於て二段三段の滑走法に依つて身體を前方に推進せしめてゐるが、これは絶対に不可能なことである。又森林の滑降に於ての身體のこなし方と杖の使用方に於ては未だ未だ研究の餘地が多い様である。

一着の關戸君の一時四分四二秒は優秀な記録であるといはねばならない。短身の君が七尺の大物を乘し得たところに榮冠が因してゐるたとも稱し得よう。ともかく競技にはよく迂るスキーを乗すと云ふことが最も必要なことである。即ち迂るスキーを如何にして登りに於て乗するかと云ふことともに、滑降に於て氣の遠くならない程度の快速を得たものである。それにしても當日の最後の小別峠からの滑

降に於て、決勝點までノンストップで來られ得た地域を杖によつて推し推し、やうやく決勝線に入つた選手の多かりしはあまりにも哀れであつた。

距離目測の迅速と不齊地の通過の巧拙とが之の大會の優劣を決したのであるが、出發後約一軒の森林滑走とリレーの降滑路の最後の林間滑走とを意のまゝにこなし得る様になつたならば北歐の走路の出でても毛頭ひけをとらないであらう。

觀衆に就いて

父兄、友達、關係學校生徒で觀衆は万の數を數ふる位すばらしいものであつた。又遠い地方の人々や、出られない人々のためにJOIKがマイクローホンを會場に設けて、競技の刻々を放送して居ながらにして競技狀況を手にし得たことも特筆大書に價することであつた。幾千人或は万と云ふおびたゞしい人が走路に散つたと云ふことは喜ばしいことであつたけれども、選手を激勵する言葉こそ知るものゝ走路員の努力を分つて競技者を愛する方法を知らないことは情ない限りであつた。次のことは今度の競技に於て出發點から一軒の地點に起つたことであるが、その地點は走路

として本走路中の最難關なところであるが、此の點を選手通過前應援の人々が通つてしまつて尻上りしてしまつたものだから、唯さへ六ツかしい處を一層六ヶ敷しくしてしまつて走路主任の應急の指示によつてやうやく選手を通し得たのであつたが、今少し雪が少なかつたり又は狭かつたりしたならば競技の中止を餘儀なくされたかも知れなかつたであらう。スキーで轉ぶのは恥ではないかも知れないが、こんな大事な處は一寸見れば解るのだから豫め避けて通る様な遠慮もして貰ひたいものである。

採點法に就いて

此の競技會は一校の出場選手人員を制限して長距離及飛躍に於て、各一等から六等までに七、五、四、三、二、一の點を、リレーに於て十、七、五、三、四、二の點を與へられ合計點の最大を以て優勝校とするのであるが、此の方法にあつては優勝選手の四五人を持つてゐる校が優勝をなし得るが、力の平均した中庸の選手を多數に有する校は常に不利である。それ故に或る校の選手が制限數だけ一競技に参加したとき、その學校の低位の選手は優勝な上位の選手をあてにして初めから競技を捨ててしまふと云ふことも

起り得るであらうし、又中程走の粒の揃つた校の選手は常に等外の主席を占めるのみであつて何等學校の發揚に益することなしとする考へからして、競技を捨ててしまふであらうと云ふことも杞憂でないことを考へるならば、各選手の孰れもが眞面目に學校の名譽のために走る様な方法に更めることによつてこの競技會をしてより以上に盛大ならしめるものではないかと信ずるのである。

それには現在の採點法を捨て、距離競走は各選手の時間の總計、飛躍競技は飛躍點の總計によつて其の合計の最高を以て決したならばよいと信ずる。

競技日程に就いて

一日に三種目の競技は當事者にとつてとてもうるさい仕事であり、今年のように長距離とリレーの走路を別々に採用することになると、とても走路員の勞力は並大抵ではない又午前走つて午後のリレーに重ねて走ることも選手にとつて長距離とリレーの合計距離を一時に走るより以上につらいことである。又八軒のコースを、同じ場所を四人が時間つぶしに嚴冬の日足の短いときに、四回走ることもあまり感心したものでない。

よろしく廢止か他の方法を考へて貰つて距離競走一日飛躍競技一日と云ふ日程でやることを來る第三回に實行される様に考へて貰ひたいものである。

十三杆長距離競走成績順位

氏名	學校名	出發順	所要時間	得點
1. 關戸 力	(樟商)	26	1°44'42"	7
2. 大浦 忠二	(#)	31	1°6'25"	5
3. ニツ山勝一	(#)	65	1°8'10"	4
4. 桑田 正一	(旭中)	59	1°9'47"	3
5. 安孫子正二	(一中)	56	1°11'6"	2
6. 相見 健二	(北中)	16	1°11'22"	1
7. 藤澤 伸行	(樟商)	46	1°11'49"	
8. 上 島 宏	(一中)	25	1°12'6"	
9. 澁谷 虎藏	(北商)	41	1°12'34"	
10. 坪川 武重	(#)	63	1°12'49"	
11. 木越 定彦	(樟中)	13	1°13'6"	
12. 山口 正一	(北中)	58	1°13'11"	
13. 伊藤 雅男	(二中)	54	1°13'48"	
14. 上 島 信	(一中)	49	1°14'6"	
15. 毛 内 章	(北中)	55	1°14'41"	
16. 藤山 嘉造	(北商)	19	1°16'4"	
17. 松本 辰夫	(一中)	32	1°16'26"	
18. 川崎 正市	(樟水)	61	1°16'40"	
19. 石塚 正雄	(札師)	6	1°16'42"	
20. 伊藤 五郎	(旭師)	34	1°16'45"	
21. 松本 信通	(札師)	45	1°16'50"	
22. 香曾我部節	(北中)	40	1°17'18"	

氏名	學校名	個人所要時	組所要時	得點
23. 伊藤 正治	(北商)	1	1°17'29"	
24. 宮田 進	(二中)	9	1°17'36"	
25. 錦戸 善吉	(北中)	33	1°17'47"	
26. 小野寺 正	(北商)	48	1°18'11"	
27. 谷 春雄	(北商)	18	1°18'47"	
28. 竹内 温夫	(札師)	10	1°19'0"	
29. 安味 貞利	(名中)	39	1°19'5"	
30. 小 柳 精	(樟水)	12	1°19'54"	
31. 八木 孝夫	(札工)	14	1°20'5"	
32. 川村善一郎	(旭師)	11	1°21'30"	
33. 山口 孝	(二中)	66	1°22'10"	
34. 高野 泰佐	(旭師)	43	1°22'23"	
35. 大泉 正二	(札工)	42	1°22'42"	
36. 齋藤 幸治	(北商)	2	1°22'59"	
37. 田口不二男	(二中)	52	1°23'7"	
38. 青山喜久治	(樟水)	53	1°23'15"	
39. 鈴木 歳郎	(俱中)	22	1°24'9"	
40. 木 村 浮	(樟中)	5	1°24'26"	
41. 永井謙一郎	(濠中)	27	1°29'7"	
申込總員	67名	競技前中止	9名	
出場總員	58名	競技中止	17名	

三十二杆リレー成績順位

氏名	學校名	個人所要時	組所要時	得點
1. 小池 高行	樟商	51'3"	3°6'58"	10
2. 大浦 忠二				
3. 關戸 力				
4. ニツ山勝一				

校名	種別	選手名	種別	得点	順位	得点	順位	得点	順位
久米正夫	1.	久米正夫	1.	5413 ⁰	0	33153 ⁰	0	0	0
上野壽三郎	2.	上野壽三郎	2.	5941					
後山玄也	3.	後山玄也	3.	4819					
高畑忠雄	4.	高畑忠雄	4.	4940					
小柳村信輝	1.	小柳村信輝	1.	5451 ⁰					
木越淨彦	2.	木越淨彦	2.	590					
箕輪定彦	3.	箕輪定彦	3.	4648					
箕輪名	4.	箕輪名	4.	533					
虎藏	1.	虎藏	1.	4927 ⁰					
武重	2.	武重	2.	4815					
嘉造	3.	嘉造	3.	4914					
伊藤正治	4.	伊藤正治	4.	4927					
小野幸一	1.	小野幸一	1.	5420 ⁰					
黒木研三	2.	黒木研三	2.	5013					
竹内三寛	3.	竹内三寛	3.	4615					
但野寛	4.	但野寛	4.	4816					
相見健二	1.	相見健二	1.	4943 ⁰					
山口正一	2.	山口正一	2.	5035					
今野正草	3.	今野正草	3.	5045					
毛内	4.	毛内	4.	490					
佐藤正一	1.	佐藤正一	1.	5021 ⁰					
秀二夫	2.	秀二夫	2.	5423					
杉本二郎	3.	杉本二郎	3.	4855					
小野正	4.	小野正	4.	4656					
上田輝夫	1.	上田輝夫	1.	5023 ⁰					
中村健次	2.	中村健次	2.	5213					
上野愛察	3.	上野愛察	3.	4851					
小川	4.	小川	4.	5223					
生田出	1.	生田出	1.	5234 ⁰					
平塚義雄	2.	平塚義雄	2.	5328					
今野良雄	3.	今野良雄	3.	5025					
伊藤五郎	4.	伊藤五郎	4.	5011					
伊藤雅男	1.	伊藤雅男	1.	4937 ⁰					
宮田選田	2.	宮田選田	2.	5053					
上田不二男	3.	上田不二男	3.	5512					
山口不二男	4.	山口不二男	4.	5140					

各校得点一覧表

校名	種別	選手名	種別	得点	順位	得点	順位	得点	順位
久米正夫	1.	久米正夫	1.	5413 ⁰	0	33153 ⁰	0	0	0
上野壽三郎	2.	上野壽三郎	2.	5941					
後山玄也	3.	後山玄也	3.	4819					
高畑忠雄	4.	高畑忠雄	4.	4940					
小柳村信輝	1.	小柳村信輝	1.	5451 ⁰					
木越淨彦	2.	木越淨彦	2.	590					
箕輪定彦	3.	箕輪定彦	3.	4648					
箕輪名	4.	箕輪名	4.	533					
虎藏	1.	虎藏	1.	4927 ⁰					
武重	2.	武重	2.	4815					
嘉造	3.	嘉造	3.	4914					
伊藤正治	4.	伊藤正治	4.	4927					
小野幸一	1.	小野幸一	1.	5420 ⁰					
黒木研三	2.	黒木研三	2.	5013					
竹内三寛	3.	竹内三寛	3.	4615					
但野寛	4.	但野寛	4.	4816					
相見健二	1.	相見健二	1.	4943 ⁰					
山口正一	2.	山口正一	2.	5035					
今野正草	3.	今野正草	3.	5045					
毛内	4.	毛内	4.	490					
佐藤正一	1.	佐藤正一	1.	5021 ⁰					
秀二夫	2.	秀二夫	2.	5423					
杉本二郎	3.	杉本二郎	3.	4855					
小野正	4.	小野正	4.	4656					
上田輝夫	1.	上田輝夫	1.	5023 ⁰					
中村健次	2.	中村健次	2.	5213					
上野愛察	3.	上野愛察	3.	4851					
小川	4.	小川	4.	5223					
生田出	1.	生田出	1.	5234 ⁰					
平塚義雄	2.	平塚義雄	2.	5328					
今野良雄	3.	今野良雄	3.	5025					
伊藤五郎	4.	伊藤五郎	4.	5011					
伊藤雅男	1.	伊藤雅男	1.	4937 ⁰					
宮田選田	2.	宮田選田	2.	5053					
上田不二男	3.	上田不二男	3.	5512					
山口不二男	4.	山口不二男	4.	5140					

Hans Morgenthaler の事

井 田 清

その三里だか四里だかの眞直ぐな開墾道路と言ふのを、何か當はあつたのだらうが、そんな事は全く忘れて、唯歩いて居ると、一足一足、足の重さだけ前に運ばれて行く毎に、自分の衷に在る或るものが、肩のこりの様に、そろそろほぐれて行くやうであつた。

或時は餘り歩き過ぎて、チリチリバラバラになつて終つた自分にやけくそになつて、大聲にわめき乍ら溜息の虚勢を爆發させたり、又或時は杖で路傍の小石や雜草をたゞき乍ら、原野のやうに擴がりすぎて、掴み所を失つた自分を、何かにたゞきつけて見なければ不安でたまらない様な氣持に籍られたりしたのだが、歩いて居る間に次々と自分に不用な心持が遮されて行き、何時の間にか心の中では「黙

つて居る事の喜び」が段々と色濃くなつて行つた。その喜びの一滴一滴は、自分のまだ知らない心の隅の方へ深く暖かにしみ涉つて行くやうであつた。

丁度、その様な感情にひたる時に、自分の心には Ha. の姿が想ひ浮べられ、うつゝてくる様である。氣付かない間に、人は山や谷を、そのまゝそつと自分々々の感情で受けとつて居る。そして何かの折にふと、自分の心の何處かで鋭い山陵のやうな感情や、谷間のやうな衷に向つて靜かに満ち溢れてくるその様な感情などを好いて居るのに氣付く!!!

それらの感情と山の象とがたちきなくなつて居る事にも氣付く、或は他の人間的な情緒までが山の感情と結ばれ

て、山の象は人間の外貌以上に意味深く、親しく、古いなごみの様に心につつて居る事に氣付く。山は自らのありのままの鏡ではないかと思ふ。

そして山の好きな人達は何時の間に自分の心が受けとつて居る、山といふ色々な感情と、谷・地平線・森・空の弓なり等の色々な感情とを結び合せて、自分だけの自分らしさを胸に強く深く感じ持つて居る。それは丁度山といふ垂直の縦の線と、地平といふ水平な横の線とが、十字架の様に結ばれたその結び目の様なものだ。

その結び目に Ha. Mo. の姿がうつし出される。山を鏡にして、その結び目の一點に幻像を合せると、登山家と藝術家との混血児であつた彼の姿は、朦朧とする事なく、明確にうつし出される。と私は想ふ。

感情で山を測量してゐる彼。 Ihr Berge の中から人々に話しかける彼の姿。彼の姿の深さは、彼の感じてゐた「山の意味」の深さに比例して居る。

山についての「意味の感」は彼に一條の生活を願はせた山のひろがりがある彼の心にしび込んで、彼に Ich selbst を贈つた。

登山といふ生活の行爲の「生活者」であり「表現者」である彼の顔、山に對しては行爲の詩人であり、裏にとつた山に對しては表現の詩人であつた彼。

主觀への没入。山と自我との轉換。

山から汲んだ「意味」を追つて、人知れず裏に山旅をづけ終つた彼。又一方には「山」の表現に苦心し、觀照に徹しやうとした純粹な詩人であつた彼。

旅の喜悅と寂寥の中から、山の「高さ」を知つて居た彼にのみ初めて書く事の出來たシャムの原始林の風貌。山の喜びと意味とが堅く結ばれ原始林の奥に擴けられた TAHARI の詩情。

Volv. 中の痛々しさ。終焉に近づいた彼の姿。

“Gute, solwere Tati” そんな彼の一生。

原野の茫漠さの中に、赤褐けたかたい開墾道路の細い條を遠くの地平線に向つてひいて見る。その様な畫面を考へる。その様な條をひかれた原野の茫漠さの意味が何んであるか、そして人は理解といふ條を他人の心の中にまでひいて、其處から原野と道との意味の様なものを汲みとる、そ

の意味が何んであつたか、そして又登山家の席を何時の間にか辭して居た Ha. Mo. の心が、山を鏡にして心にどう反射して來たのか、その意味を原野と道とに結んだかどうか、それらは皆各自の心のままである。

私はよく思ひ出す。

その三里だか四里だかの真直ぐな開墾道路と言ふのを、何か當はあつたのだらうが、そんな事は全く忘れて、唯歩いて居ると、自分の心情と一所になつて Ha. Mo. といふ登山家と藝術家との混血兒の心が、自分のまだ知らない心の隅の方へ、糸の様にほぐれて來る。事を。

油砥石の上で、そつと靜かに研がれる刃物の様にすべっこい、衷にしみ渡る鋭さで、自分はふと彼の心の事を想ひ起す。

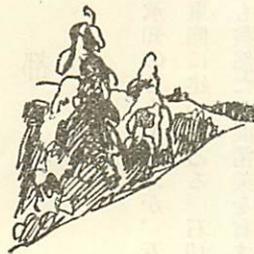
私は又知つて居る。

彼の事を想ひ浮べるには、自分の心にひたつて見るより仕方ない事を。

〔附〕

Hans Morgenthaler の著書を擧げると次の如くである。

Ihr Berge	1920
MATAHARI	1921
Ich selbst	1923
Woly	1924



空沼附近のスキー生活

宇 都 宮 高

これは自分の一種の思ひ出話と云つた方が面白いかも知れない。過去六年間のスキー生活を想起すると、第一に念頭に浮ぶのはヒュッテの生活だ、仲にも空沼小屋に於ける幾度かのスキー生活或は夏期に於ける生活が連想さる。

空沼小屋は昭和三年に建設になつたものである、全部木質建造物で、近代山小屋建築の尖端を歩いてゐる。日本に於ける山小屋の歩みは現在では北海道にあるが、その中でも最も進歩したものは此の小屋と云つてよい。勿論仲には色々の批評も、議論もあるやうだが一つの建築として論じて見、又使用方面から考へても進歩したと云つてよい、材が全部附近のものを使用され、又その尺度が非常に豊富に使つてあることはさすがに特長である。

小屋の位置は承知のことゝ想ふが、万計沼の北側岸、万計澤の發路口の東側に建つてゐる。石切山からの道も立派だし途中の樹林も整然たる混落美を有す關係上十二軒餘の道も樂に行くことが出来る。途中で道を間違へる様なことは無い。

此の小屋が建設に至るまでは大分困難があつた様だ、場所の選定をやられたのは大野部長、山崎教授、小川氏等であつて、建築請負事業は伊藤組である。此の村の堂本の親爺さん等は毎日の様に手傳つて下さつたことは特筆す可き義務がある。親爺さんは此の附近の區長株であるが、常に此の村の發展上より見ても山小屋の建設は嬉しいものだ。常に話された、自分も二三度此の親爺さんの家に泊めても

らつたことがある。仲々徳望の人だ、大概此の小屋に關係したものは知つてゐる。

此の小屋の建設までには色々のエピソードも多分に有るが此れは他日を期して紹介しやう。此れからはスキー生活を主として話しを續ける。

伊藤健夫兄より手紙を戴いたのは昭和四年二月學生聯盟スキー大會當日だつた。ちやうど其の時僕は風邪で寝てゐたので手紙をすぐに手にすることが出来た。その内容は高松宮殿下の御來札とそれに關する山案内の件だつた。特に空沼小屋附近のスキー地の調査を頼むとのことであつて貝沼君等と行動を共にしてくれとのことであつた。此れが最初の僕の空沼附近のスキー生活の端緒である。

インターカレッジ開催中、小栗君、貝沼君、岩垂君、永井君と小生都合五人が空沼小屋に行つた。二月であつたから雪質は上等、遊ぶにも好時期だつたがそんなには行かず毎日地形を探つてゐた。

石切山から湯之澤までは何時もの様にのび／＼として出かける。湯之澤からは新コースを見出す爲めに色んな澤を歩いて見た。然し容易にコースが発見されなかつたため、

二班に分かれて夫々異なつた道を無理に探した、僕等の取つたのは現在冬期に登るコース、即ち万計沼を右に取つて登る針潤混落林の地帯である。傾斜角度も少しいし、景色も好かつたので此のコースを殿下案内コースとした。他の方面は複雑した小澤多く香しくなかつた。

空沼小屋から空沼岳までの登行道路は都合よく見出された、此の天気快晴、空沼岳から續く尾根の樹氷並に樹間の暗明は極美と情緒ある物語りを型作つてゐた。竹む樹木幾百年かの生活を次から次へ物語り出されそうに地面になれてゐる老木、又は奇形な白樺、あらゆるものは靜かに陽炎を浴びてゐる。スキー生活は何を楽しみとするか。ゲレンデの痛快味か、山の美を味ふことか。僕の様におかしき判断を有する山岳味を楽しむか、總てが色取り取りに納得される爲めにスキーを楽しむか、自分にはわからない。只自己在存慾を満足する一策が此のスキー生活らしいと解釋して見たい。

此の一行と三日間空沼小屋を中心に札幌岳、狹薄岳に行くコースを探究した。結果は充分でないが躊躇せずに行けるだけの確心を得た。此の三日間が空沼小屋に於けるスキ

―生活の第一歩である。

此の満足した生活が終つてから一週間餘たつと高松宮殿下御來道遊ばされた。手稻山の第一日のスキーが何の故障もなく終られてから空沼小屋に御出になられた。

石切山から湯之澤まで楯であの寒い日に行かれたことはさぞ御不自由のことだつたらうと御察申し上る（詳細は山とスキーに記載してある）。

殿下にあらせられては三日間の空沼小屋御生活がどれだけ御満足されたかはあの折の御様子で明解出来る。ゲレンデに於ける御熱心な御練習、ステムクリスチャニアの御研究等小生等の口にするだけ恐れ多きことである。

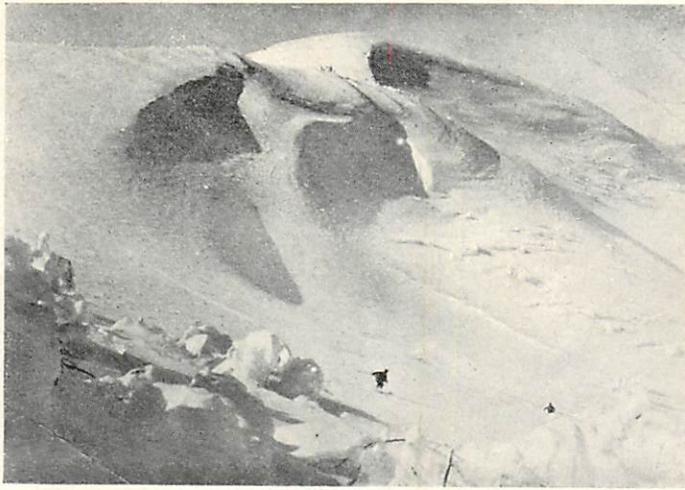
此の三日間一番自分にとつて忘れることの出来ないのは自己の在存と集團の在存との關係を納得したことである。

自己の在存とは判然と生活現象を見つめ且つその在存に依る社會の立場を認識したことを指し、集團の存在とは自己を取り圍む集團人との生活關係が現實化されて認識されたことを指す、これが何故に此のスキー生活の記述中に置かれるかは次の理由に依る。

單獨の小屋生活、淋しい程、又此れ位自由な立場にある

生活はない。彼の都會生活で只一人り下宿に在存してゐる場合は本當の孤獨感を抱くことが不可能であるが、山小屋の單獨生活は明かに自己の在存を自由にし充分に自己辯明をなし得る、特に冬期吹雪の夜の孤獨は無常の光榮に浴することが出来るものである。空沼小屋での限られた集團人畏も殿下までを集團人として記載するのではなく、只に我等の中間を指して披歴するのである。此一つの小屋の中に短期間の社會を構成するのが見られる時に、今まで慣れた靜かな生活から交際と云ふ社會觀念を授入することは何だか悲しい氣がする。その時に集團の存在を意識し得るのである。何もこと改めて説明する必要もあるまいが、本當に都會生活中は常に集團としてのみ存在がある故に意識するだけの餘裕を見出すことが出来ない、然し小屋と云ふものゝ中に於てはそれが充分意識存在の現象を想念し得るものである。各存在を知つたから今後の自己の生活をどうするかどうかは何も考へない、只此の三日間のある餘暇の時に此の存在と云ふことが意識されたから附記するに過ぎない。

此の殿下と一緒にスキーをした光榮ある生活が第二段の空沼スキー生活だ。



漁岳連峰小景

神谷俊雄

昭和五年の紀元節までには二三度空沼小屋を訪れた、勿論一人ほつちで行つた、小屋に入る氣もなかつたのだ、然し一度は何かの用事で小屋に泊つたことがある。それ以外は楽しみを有する自己獨行だ、一人だからコースはどうでもよい、高い方に登て行けば頂に達することが出来るものだから、氣樂に登ることが出来た。寒いある日、一人疲れた體を木陰に休ませ、思ひ切つた呼吸を認識しながら地圖を見ると、大分違つた方向を向けてゐる。然し驚きはしない、自分が誤つたもので、自己一人の過失だから。然しそれからは小澤と云ひ、山腹の形狀と云ひ熟視して歩いた、この爲めに今でもその時分の一步／＼が想ひ出される。深かつた積雪、風あたりの硬雪、南側面のクラスト狀、總てが明かに書き出さる。此の様に樂しかつたことはこの時までにない。此れが嫌が上にも自分のスキー孤獨を好ましめたる原因の一つである。

空沼小屋カヌエに行くには石切山よりも瀧之澤から取つた方が面白いことは少しスキーをやつた人は納得してゐるだらう、必ず人が一定のコースを作つたからと云つてそれに順應する必要は決してない、出来るだけコースを探策すると云ふ

一念は、その人を將來未知の山に行かしめる最條件の一になるからである。今まで空沼小屋行きは殆んど石切山から行つてゐる、現在は勿論、將來もそうじやないかと思ふ。何んでも注意して瀧之澤から空沼小屋に行つて欲しい。

昭和五年の紀元節に空沼小屋が初めて公開された、當日は儀式と同時に一般使用公開式が舉行された。大野スキー部長を始め、醫學部の中村教授並に御料の人々等二十數人の來會者で非常に盛會だつた。式は午前七時万計沼上にて行はれ、君が代の合唱に次いで、學生の宣誓式があり、國旗は湖上に前途を祝福してゐた。加ふるに万天雲無きの好天氣、タンネ林は朝光に反映し心ゆくばかりの爽快な日だ。式が終つて附近の山を散策す可く出かけた。空沼小屋は沼畔に微笑をたゞへ我々の歸りを見送つてゐる。次第にタンネの中に消へ行く姿はジツクザツクが楽しく續けられる反面に名残り惜しきものがある。

眞廉沼は空沼岳の續く尾根から吹き下す微風に寒氣を憶へてゐる。愉快に話しながら進む一行は自分達の社會かの如く遠慮なく與太を飛す。小屋から一時半有餘歩行を續けるともう狭薄のテレスに出る。東面が急傾面を呈してゐる

上部の方には雪屁が鋭く延びてゐて、深い影を型作る。北面の奇形に富んだダケカバは樹氷に埋れてゐる。漁岳方面が判明と曲線を映じてゐる。頂上。十時だ。無意根岳、中岳。或は羊蹄岳が大きく白線を描いてゐる。一行中の鈴木君は北海タイムスの傳書鳩を氣持ちよく放つ。鳩は我々の頭上を數回廻る今日の儀式の命を帯びて北の方に飛んで行く。スキー登山で傳書鳩を使用したことは餘り聞かない。

北海道ではこれが最初の計畫であらう。狭薄の頂上、山としては餘り高くないが、此の所から傳書鳩を飛ばしたんか、今想ひ出すと愉快でたまらない。此の傳書鳩が充分使命を全うしたことはあとでわかつたが、好く山岳地を踏破したと思ふと我々がスキーで山に迷ふことなんか恥しい次第だ。

此處から小生共四人、他の一行と別れて中山小屋に向つた、天氣の爲めに半クラストにした傾面は我々を可なり苦しめた。

其の後、此のシーズン中空沼小屋に行く機會を得なかつたのは残念でたまらない。なんせ學校の都合で内地に旅行したもんだから行けなかつた。

昭和六年のスキーシーズン、自分として此れ位スキーをはいてかけ巡つたことはない。最後のスキーと思へば思ふ程、何處もかまはず歩いた。然し空沼小屋に出掛けたのは一回しかない、そんなに行かなかつたと反省して見て不思議な位だ、どうも山歩きは時間と金がいるからそんなに無茶に行かれないのは無理はないが、只の一回と思ふと名残り惜しい氣がする。人間だつたら舊友の様に思はれる小屋附近の林が今でも待つてゐると想ふと飛んで行きたい。

此の一回の空沼行きは紀元節祝日の當日で、去年の此の日を追憶させるのに充分な記念日だつた、今年は一般公開日より一週年目で、氷垂の形までが昨年と同じ様だ、その上天氣までが申し合せた様に快晴と來てゐるから何の慾もない、只學生の顔連が少し違つてゐる、若々しい將來を語る元氣の士ばかりであつた。何時でも變つたと思はれないのは大野部長の愉快な談笑だ。

話しが少し食ひ違つたが、空沼小屋に向つて出發したのは三月十日午後一時十五分の電車で石切山を出發した、午前の汽車におくれて皆んなに失禮したわけだ、やつぱり僕の様汽車に乗り損つた齋藤が居たからアラインゲーンで

なくすんだ。此の考へは少し横着だったが「どうせ先に皆んなが行つてゐるから夕食の用意は出来てゐよう。ゆつくり行くさ」と本當に二人は出掛けたが。一二町歩く中に次第に歩調が早くなつてさつきの考へは何處へやら、堂本まで可なり急ぎ足で滑つた。三時頃の太陽は馬鹿に微弱なもので、夏の六時頃としか思はれない。空沼岳一帯は薄雲にほんのりと姿を現し、場所に依つては其の微光に酔つてゐる所がある。

湯之澤、澤の水音も夕日に調和してゐる。此處で海豹を附けてゐる中に夕日は山蔭に落ちて行くし、急に寒くはなる。齋藤君から貰つた卵を食つて歩き出す。Wachsの加減が拙かつたため二三度海豹が取れる。此の時氣温と海豹との關係が少し了解された。海豹を Wachs で密着せしめる第一の要件はスキ一の面と、海豹面とが出来る限り平たいことである、で結局海豹面の平たいことを要求するが此れは Wachs を塗布するときに充分骨を折つてやると云ふことが必要である。それから両面が平たいものであつたら適度の温度が必要にして、相互の融着するまでその温度が放散されない様にしておかねばならぬ。此の温度と云ふ問題に來ると仲々むづかしい、此の事柄に關しては他の機

會を見て紹介しよう。

途中の馬之脊あたりに來ると大分暗くなつた。足元が不明な位になる。小沼が見へた。傳説ありそうな所だ。微風の爲めに笹がある孤獨感の音響を與へる。淋しい様には思はれない、美しい自然の Beauty を表現する。

小屋に着いたときは、もう皆んな食事中、堂本の親爺さんの聲がはつきり浮び出る。あゝ爺さん居るなアとうなづく。大野部長の外に木下教授の顔が見える。若いスキー部員は一儲けした様な顔をしてたらふく喰つてゐる。

二月十一日、快晴、儀式は去年の通り終了する、七時半万計沼に御別れする。國旗は西風に飄つてゐる。名残りある湖上の風景だ。美の構成的原理が實踐的の領域に達した只永眠を物語る Tsuchungataki である。

八時頃になると少し風が出て來た、溜り雪が躊躇もなく落ち初める。大きな音、吹雪の様な粉雪、足元を不意に驚かす雪塊、此等は我々を無心に懐かしめる。眞簾沼、一直線にスプールを残して行く。靄が出て來た。風も冷い。

十時、もう狭薄岳の頂上近くだ、ダケカバの樹氷は以外に多い。心行くばかり見惚れたくなる。頂上 Shi Hall 空沼岳が左に、惠庭岳、漁岳、小漁岳の面々うかび上つ

てゐる。反對には無意根岳連山が輝いてゐる。余市岳の山頂は雲にかくれてゐる。下降。札幌岳に向つて。二百米餘の痛快な滑走だ。狭薄澤の八百米の所に出る。晝食だ、風があたらないからとても暖かい、満腹した奴は何にも言はない、だが誰かが何やら與ると云ふと、やつぱり喰ひ氣があると見て否とは言はない。皆んな笑ふ。山に行つてもこんな氣分になつて皆んなが遠慮なくはしやぐから、何と云つたつてうれしい。子供になつた心持ち *athletisch* も *metallisch* の世界もありやしない。本當の社會が表現される。

此の狭薄澤から札幌岳の尾根に取り付く、やつと百米ばかり登つたと思ふと又海豹が除れる。然し今日は日光の暖味で確かに融着する。札幌岳の面白味ある形態、南面の矮小なカバ林、それに續いて南面に流れる尾根、その尾根の東側には雪庇が一直線に下つてゐる。前に行く連中はその雪庇でまごつく。誰かど無理にその雪庇を切貫ける様子が見える。彼寸時後大分下に滑り流さる、若し樹木がなかつたら下まで轉け落ちたかも知れない。僕と齋藤君とは雪庇の東でスキーを脱捨て、スキーを擔いで一直線に登る。表面二三寸は柔く、下の方は半クラスト状を呈する。木影の所に來ると膠の所まで埋る。然し何だか氣持ちがよい。頂

上近くになると堅雪で踏む感じが大地を歩いてゐる様な氣がする。

頂上、十二時、何處の山も皆見える。日本海、増毛半島遠くは雨龍の連峰も臨むことが出来る。一方札幌岳から小瀧澤に走る尾根の斜面は吾々の滑降を喜んでゐる様だ。馬鹿な余談に花を咲かせて下降し始める。滑るく、轉ぶ轉ぶ。快味たつぷり喰ひ込んだ。樹林地に來ると雪質良好、粉雪は長い間續く。ステムも何時になく練習が出来る。一度轉び出すと重心が不安定となる爲めに數度の轉倒も續出す、研究的態度で滑るだけの余裕が無い。時に休む度毎に皆んな *Witch-Kicker* の練習だ。稻葉君程に上手になつたものはない。皆んな少しは出来る。轉換した際に余裕が見出されず、ごろりと轉倒。小瀧澤よりもつと上流の小澤を滑走し初める頃になると疲れ出す。

豊平川の本流に出る。心ちよい流れは雪氷に大分理れてゐる。河岸の橋道は馬糞で黄色い模様を畫いてゐる。三石余の丸太材が疲れ切つた馬で引かれ行く。鈴の音が夕暗を破つて石狩平野を行く様とは全然違つた感じを與へる。それは苦痛の音だ。我等のスキー疲勞の苦痛とは調子が合はない。

(二五九一、五、十二)

全日本選手権大會に臨みて (二)

時 日 二月十七日午後六時

場 所 札幌商工會議所會議室

出席者

箕輪正治、秋野武夫、本間四郎、小野寺將、村井延雄、關口勇、長田光男、葛西儀四郎、高橋次郎(小樽高商教授)、南留三郎(札幌商業教諭)、錦戸善三郎(札幌第一中教諭)、高野重一(北海道廳員)、宮下利三(道廳)

大野教授、栃内教授、廣田戸七郎、高橋昂、長野寛

下利三(道廳)

大野教授、栃内教授、廣田戸七郎、高橋昂、長野寛

下利三(道廳)

宮 下 大會の時は何度位でした。

秋 野 零下十二三度です。リレーの時に

栃 内 十二三度。急な所を飛ばしたら耐えますね。

小 野 寺 一番息を出す時には綿のやうになります。

葛 西 非常なスピードで下へ下りる時には非常に冷えて前の方が痛くなつて来る。

高橋昂 それは僕は選手が用意が足りなかつたと思ふ。

ノルウェーの選手は麻の薄い褌を穿いて居ります。僕は富

士絹で造つたゾロースのやうなものを穿いて居ます。それを穿いて居れば幾ら経つても寒くならない。

栃 内 富士絹で大丈夫ですか。

高橋昂 風を通さない、

南 樺太の選手は真綿を穿いてゐた相だ。

栃 内 樺太の選手でも、さういふことをやつたかね。

樺太の選手は慣れてゐるからそんなことをしないでよいと思つた。

廣 田 あれはね痛くなつた後を温めると非常に膨れる

宮 下 この前に樺太で福田がやつたさうです。

高橋昂 札幌でも前の方が痛くならないやうにする爲に

富士絹でもよいしボブリンでもよいから穿くことです。

南 手袋はどういふのがよいです。

高橋昂 軍手ぢや駄目——皮のがよい。

秋野君は手袋も穿かずに勇敢だつたと思ふ。

何共ないですか。

秋野 十八キロの時は暖かつた。この前行つた時には樺太では一遍も手袋をはめなかつた。

宮下 あんたは別製だね。

秋野 然し寒いよ。我慢するのだ。

南 長い洋袴を穿いたのは少かつた。

錦戸 あつた／＼あれは確か五十番で白い洋袴——あれは柔道の洋袴だつたが實に勇敢だ。

小野寺 四十三番の栗谷川、あの人はダラ／＼上るのが得意で、栗谷川は私より先でその先を一寸見ると五十番で凄いい、一番よいところを見たな。

南 齋藤といふ人はステックも何もつかずに、ボン／＼走つてゐた。

錦戸 ステックなんか上で折つたもの。

南 唯身体を中心に探つてゐるたやうなものだ。

五十番ならとても走つた、先づ栗谷川さんに追付くのだと思つたらその後と應援が全部大勢向ふばかり見て、

それから一番最後に一番の急坂がある。あいつをボン／＼走る。ステックを付かなかつたのが不思議に走つてみたら

吾々より走るやうであつた。

随分短いスキーを穿いてゐる。

高橋昂 雪は七尺か六尺四五寸——二三寸が恰度よく入る些共逆行しない。

コースは區々だしね。

スウイングする場所がないんだものね。

高橋昂 だからリングは要らない。

ステイックの話になると北海道の選手はウエーブを上がるのは非常に下手だと思ふ。見てゐるとみんなウエーブを苦心してゐる。之は北海道の選手は練習して貰はなければならぬと思ふ。

そこへ行くと樺太の選手は巧い、一方の足を踏みこたえてステイックを手に一步宛走つてゐるけれ共波をつけ——坪川なんか一生懸命出してゐた。一つ位乗り越して。

南 大部面白いのがあつた。ウエーブで。

秋野 絶えずスケートに迂りして、正直にやつてゐるは駄目だ。

高野 信越の選手は大体よかつたではないか。

廣田 信越の選手がよかつたといつても松橋と上石だ

けだ。

宮下 あれが強いんだ。

南 高田の松橋のはとても無茶なスピードを出して上り方は實に早い。あれは何處でも巧いんだらふ。

宮下 猛烈だね。

錦戸 僕は南先生から又聞きですがストックが飛んで見えたといふことだ。

南 登山の斜面と下り山から上りだけ見てゐるだが、大概の方は同じだがあの人は一人違つて早かつた。その何處の人だかわからないが早かつた。相對的に見て一尺位飛んでそして体重にステックが引張られて体を前進、ステックを投げた空間に對して垂直で決して前に投けない、銳角にやる。そして肩を出す。だから投げたストックは必ず垂直に立つ、そして足數よりも腕數、非常にあすこが見物だ

錦戸 リレーのラストは凄かつた。

栃内 身体は大きかつた？

廣田 ガツチリしてゐるたが大きくない。

高橋昂 六尺二寸とか三寸とか言つてゐた。何でも大きいな。

葛西 今度ので五十キロコースのポイントが少なかつた。距離のコースを探つてゐるから不便はなかつたが、食

料に一番困つた。説明には、どこ〜にあるといふ説明であつたが、それがどこ〜といふのをうっかりして通り過ぎたさういふ人が二三人あつた、食料供給者は何か旗を立てるとか何とかして、そこへ行かないうちに食料供給所が判る方が非常に便利と思ふ。大抵今迄はポイントに立つてあつたが、今度はさういふことはなかつた。

南 實際アルファベットのやうなのが立つて居たらいいですな。

高橋次郎 樺太は内地の大會の見學が不充分です。

高橋昂 オリムピック一行が歸つてからの内地の大會で途中の状況を一向見に行かない、只ゴールに行つてスタートの決勝を見て歸るといふのが多い。

Lake Placid のオリンピックピツクスキー場

Godfrey Dewey

武野芳枝譯

一九三二年 Lake Placid に於けるオリムピック冬期競技のスキー飛躍競技は Lake Placid クラブの Intervals 六十米突ジャムプ臺に於て開催される筈である。此のスキー場は長年月を経過して漸次洗練され、完成されて來たのであるが、レコード破りの長距離を飛躍させる爲ではなく、寧ろ、選手權大會に最も良く適つたスキー場に仕上げんが爲めに、有らゆる努力を加へたものであつて、遂今日に到つては四十乃至六十米突の飛躍には現在では最も完全に作られたものであると私は信じる。

側面及平面の挿圖は、實物に最も近く半米突と異らぬ正確さに、總ての重要な寸法を示すものであるから、幾頁かの言葉を費すよりは遙かに良く此のスキー場に就いて知る

事が出来るであらう。であるから私は單に此のジャムプ臺の最も顯著なる特徴に就いて二つ三つ述べて見やう。

第一に大きさに就いて。先づ世界のレコードが五十米突を経て六十米突となり、今や七十米突となつてより、此の競技の最も興味あるところは、最大限距離の上に又苦心して新レコードを作ると云ふ點にある、と云ふ感じが一般に動いて來た。速度と傾斜は距離の増長に従つて増大されねばならない。又轉倒から來る危険な被害の率も、其の速度の二乗丈増加するが、一方身体の筋肉及骨の緊張力は不變である。そこで、最も周到なる研究の結果、我々の最善の判断を下すと、優秀なる飛躍者は約五十米突の飛躍に於て最も良く其の技術と勇敢さと飛型とを表す事が出來た。而

して私は一九二八年サンモ・リツツ (St. Moritz) に於ける第十回國際スキー會議に於て此點が強く確認されたのを聞いて喜ばしく思つて居るのである。或既定の日に、一流ジヤムバー連によつて實際飛躍されるべき距離を、内外共に十米突以上細密に豫言する事は不可能かも知れないから、平均五十米突のジヤムプには、勿論四十米突から六十米突迄の間の如何なる距離の飛躍にとつても完全たるべき飛躍を必要とするのである。吾々が此のオリムピックススキー場を此の大きさに拵り上げたのは、非常なる注意と思慮を廻らした撰擇の結果であつて、元來自然の儘の此の丘は、決してより多くの費用を掛けなくとも、七十五米突迄ならば如何なる距離をも出し得る様に拵り得たのである。

又次に、一般數多の例に比して此のジヤムプ臺の最も顯著なる特徴は、シャンツエの端なる實際の踏切り點の直前の直線斜面部 (譯者註—普通シャンツエと稱する六乃至十二米突の長さの部分で曲線斜面と踏切點との間の直線斜面部) を除去したと云ふ點にある。普通此の直線斜面部と云ふものゝ目的は勿論ジヤムバーに絶對的確固さを以つて飛躍に臨む準備の機會を與へる爲めである。此の直線斜面部と云ふもの

に對する抗議に三つあつて。

1. 五乃至六米突の直線斜面部に慣れたる飛躍者は、十乃至十二米突の直線斜面部に於て彼の踏切りの時を測るに困難を感じる。又其れに反して、

2. 普通選手權大會の飛躍に用ひらるゝ一二〇 或は六度の傾斜は其の直線斜面部の通過に於て、絶えず速度が失はれて居る。

3. 直線斜面部 先立つアプローチの曲線斜面から、其の直線斜面へ移る場合に生ずる壓力の輕減は飛躍をなす場合の確固たる感じを減ずる。

之に反して若しもアプローチの頂上より、現に踏切りをなすシャンツエの端迄、何處の部分に對しても均等である充分長さ半徑の弧となるべき曲線を注意深く續かせた斜面を作るならば、各飛躍者は何ら亂さるべき障害も無く、思ひ通り正確に各自の目を以つて踏切りの時を測り得るであらう。又速度の減退も最少限度に止め得やう。而して各ジヤムバーは、現に踏み切りと云ふ段に到る迄、終始、僅少で而かも不變な確固たる壓力の感を受けると云ふ有利な立場におかれる。此の特徴は最初のもので無く、又且つ試み

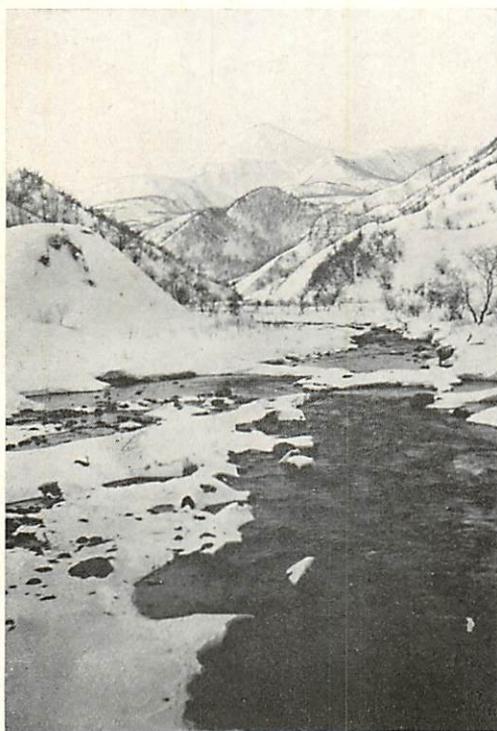
られなかつたものでも無く、非常な成功を以て、他の多くの場所で用ひられた。即ち、一九二四年、シャモニーに於けるオリムピックジャムプ競技及び一九二八年、距離の世界レコードを作つたボントレシイナのベルニイナの大會等に於てある。併し乍ら、此のジャムプ臺は曲線斜面を作るのに一二〇米突と云ふ程の大きな半径を用ふる事の出来た最初のものであると私は信じる。

此の飛躍丘を種々異つた状態に適應させる爲めに、普通の出發點から垂直に六米突下つた所に中間の出發臺を設けてあつて、平均飛躍を凡そ十米突短縮する様になつて居り又、踏切りの二米突延長の部分は、五分間にして取り去る事が出来るが、之は平均飛躍距離を凡そ五米突延長する事になる。此の二米突の延長部分は、勿論シャンツェの直線斜面部として作つたのではなく、半径一二〇米突の弧たる曲線の正確なる延長である。此のオリムピックジャムプ臺の傍に、吾々は今年（譯者註、一九二九年）又新たに小ジャムプ臺を造り加へ、之は最大限三十米突の飛躍が出来るのであるが、之も亦、オリムピックジャムプ臺が六十米突の飛躍にとつて完全であると同様に、三十米突の飛躍にとつ

て全く完全である事を希ふ。且、益々多くのジャムパーによつて、彼等が選手權大會に臨むに到る迄、其の技術を發達させるべく益々多く用ひらるゝ事を疑はない。

此の飛躍丘に既に造られてある觀覽席は無双の企圖のもので、收容人員は千人、兩側の各百人は審判席と殆んど同様に飛躍丘全体を見渡す車が出来、兩側の各四百人は、非常に居心地良き便宜な位置から丘の下半全体を見る事が出来る。丘の兩側、着陸斜面の麓から飛躍臺迄、又飛躍臺から頂上迄の片側には、氣持の良い木造の階段が続いて居るオリムピック競技の際には、以上の人員の他、數千人の觀覽者を收容する觀覽席が兩側及正面圏外に設けられる様になつて居る。

此のオリムピック飛躍丘は東北斜面になつて居り、此の地方では最も望ましい向きである。昨冬、冬期競技學生聯盟の選手權大會に續く番外に於てシカゴのノルゲスキークラブの *Geurt Dilland* が五十九米突及六十一米突各不倒の美事なる飛躍をなしたる際に、此の六十米突飛躍丘の實質上の正確さは明らかに確認されたのである。



羅白市街より見たる羅白岳 羅白山岳會

.....
雜 錄

早春の羅臼岳

知床半島の山々もこの數年來夏季には既に多くの登行が行はれて記録されたものも少くないが（北大スキー部記念出版、一九二六年、北大山岳部々報（二）一九二九年）積雪季の登山の試みられたことはあまり聞かなかつた。

こゝに本年四月中旬、羅臼山岳會員の方等が之を企てられて成功せられた通信があり、寫眞をも贈られたので、その概要を摘記して掲げる。

四月十二日、全日快晴、午前五時羅臼市街發—五時四十分、羅臼温泉着少憩—偃松帯を過ぎり雪田を登る—八時三十分、約七合目千百米附近にて食事休息—右手の尾根を登る—これより上全山雪に被はる、凍雪硬し—十一時半頂上着（千六百六十米—國後島の山々、オホツクの氷海、北見の平原、瞰望麗し—午後三時羅臼温泉歸着。

一行は、鈴木音治、三國千早、佐藤廣、杉山忠雄、西井

諦晏、鈴木昇次郎、金森登米治、太田民雄、森田良秋

◆購入並に寄贈圖書雜誌

- ◆山 岳 第二十六年・I 日本山岳會
- ◆會 報 5・6 日本山岳會
- ◆山 岳 XIV-1,2,3, XV-1,2,3, XVI-1,2,3, XVII-1,2,3, XVIII-1,2,3, XIX-2, XXI 2, XXII-1, XXII-2,3, 日本山岳會
- ◆ベデスツリアン 第一三一號 神戸徒歩會
- ◆山 幸 第一、二、三、四城 阪神山岳會
- ◆アルカウ趣味 第十八年第五・六號 日本アルカウ會
- ◆蝦夷往來 第二、三號 札幌尙古堂
- ◆山と溪谷 第二、三、四、五、六號 山と溪谷社
- ◆山 と 水 創刊號 中央觀光協會
- Ski news Vol. 1, No. 4 The national Ski Association of America
- ◆窪田空穂著 アルプス縦走
- ◆Berchtesgadener Alpen von Jos. Jul. Schaefer.
- ◆ヌタツク 第一號

◆次 號 豫 告

九月下旬發行の次號から雜誌の大きさを四六倍判とし、記事を全部横組にしました。そして年八回發行することに致しまして價格は

壹部 金四拾五錢

四部 (半年分) 金壹圓八十錢 (郵税共)

八部 (壹年分) 金參圓六拾錢 (郵税共)

に改正しました。

次號には左の記事を掲載することになつて居ります。

一、登 山 カール・ルーター

一、雪 庇 (一) 宇都宮 高

一、アールベルグ派の廻轉理論の疑問に就て 神谷 俊 雄

一、山を見る 井 田 清

一、御來道記念大會の距離競技に關して 高 橋 昂

一、天 狗 岳 坂 本 直 行

一、デイスタンスレースの練習法に就て (一) 高 橋 昂



第一卷總目次

自一號
至八號

論說と研究

i

瑞西山岳會の登山小屋……………グスタフ・クルツク著……………(元)

同……………山崎春雄譯……………(七五)

同……………同……………(一三)

同……………同……………(一七)

同……………同……………(二〇)

同……………同……………(二四)

同……………同……………(二八)

ii

雪崩(上)……………アンドレーアリツクス著……………(一〇四)

雪崩(下)……………佐々保雄補……………(一四)

北海道に於ける普通雪崩に就て(一)……………宇都宮高……………(一五)

北海道に於ける普通雪崩に就て(二)……………宇都宮高……………(二四)

III

スキー滑走法に就て……………栗谷川平五郎…(六)

スキージャムピングの練習法と複合競技の要領……………村木金彌…(一八三)

ゲレンデスキー術に就て……………高橋次郎…(二六三)

III

スキー保存法一考……………高橋昂…(六)

距離競技用縮具の二三に就て……………高橋昂…(一〇一)

ワックスの使用法……………クヌートオルセン…(一六六)

海豹皮かワックスか……………鈴木重雄…(二六〇)

V

登山の動機……………伊藤秀五郎…(九)

遠景……………井田清…(三)

ハンス・モルゲンターレルの事……………井田清…(三〇)

空沼附近のスキー生活……………宇都宮高…(三三)

紀行及記録

I

赤澤岳猫の耳登攀……………河内嘉吉…(一六)

メムロ 岳……………坂本直行…(三九)
三月の天狗岳と屏風岳……………鈴木重雄…(二九四)

II

昨年度のスキージャンプ界に想ひして……………廣田戸七郎…(三)
一九三二年のオリムピック選手選抜について……………廣田戸七郎…(二五)
全日本スキー聯盟代表委員會に出席して……………高橋昂…(二四)

III

札幌に於て開催せられた距離競走の感想及順位一束(一)……………高橋昂…(二五)

同……………(二二)……………高橋昂…(二六)

リレーに關する諸問題……………宮下利三…(二四)

獨逸に於けるアマチュアスキー……………酒井隆吉…(一九)

第九回全北海道選手權大會……………宮下利三…(三四)

全日本選手權大會に臨みて……………(二六)

同……………(三九)

第二回全道中等學校スキー大會距離競技及其成績……………高橋昂…(三〇)

レーキブラシツドのオリムピックスキー場……………ゴッドフレ・デヴィ……………(三三)

武野芳枝譯……………(三三)

雜 錄

創刊の辭	(一)
空沼小屋	(二)
ヘルヴェチアヒユツテ	(三)
山と雪の會々則	(四)
スキーに關する五色温泉宗川旅館の記録より	(七)
舊いヒユツテンブツクから	(二二)
奥手稻「山の家」使用規程及取扱細則	(二六)
大泊中學のシャンツエ	(二七)
空沼小屋使用人員	(二四)
早春の羅臼岳	(三五)

寫 眞 版

雪の朝の空沼小屋	大谷雄三郎
十勝岳に於けるシユナイダー氏	大谷雄三郎
前十勝岳より十勝岳上ホロカメトツクの連峰を望む	大谷雄三郎
北見富士(イクリヤタナシ山)の中腹より見たる武利岳	古屋胤雄
千島温禰古丹島根茂山	徳永芳雄
Nordparamushiri, West küste	アーノルドグブラー

Blich auf die Chikuragruppe von O	アーノルドグブラー
前十勝より富良野岳を望む	大谷 雄三郎
五色温泉に於けるウインクラール氏	
Aidafuji	アーノルドグブラー
Aidafuji	アーノルドグブラー
十勝岳の噴火口	大谷 雄三郎
春のワन्दルング奥手稻	佐々保 雄
初冬の奥手稻山の家	札幌 鐵道局
旭 岳	佐々保 雄
後鍬岳(千島幌筵島)	倉田 栢造
芽室 岳	坂本 直行
全日本選手権大會に於ける關口選手の飛躍	
チャチャヌブリ	アーノルドグブラー
ニセコアンスブリ	佐藤 信義
菅 平	三澤 満
ハンス・モルゲンターレル	
漁岳連峰小景	神谷 俊雄
屏風 岳	鈴木 重雄
羅臼市街より見たる羅臼岳	羅臼山岳會

圖 版

Spannort Hütte unterhalb, der Schlassberglucke

Dom Hütte

Voralp Hütte

Vereina Hütte

Medelser Hütte

Cadolimo Hütte

Skirhaus der S. Ulo

Albert Heim Hütte

Krionten Hütte

Projekt Gaslav Krnce 1921

屏風岳と天狗岳への登行概念圖

廣田戸七郎著

スキージャムピング

定價 金壹圓五拾錢
送料 金拾八錢

山と雪

第二號より第六號迄

一部 金參拾錢

山とスキーの會發行

山とスキー (ナンバー)

一部 金參拾錢

御希望の方は「振替口座小樽八四九五番」へ

山と雪の會

楨 有恒序

井田清 館脇操
坂本直行 山縣浩
澤本三郎 田中晴
須藤宣之助

共編

北海道の山岳
(登山案内)

四六判箱入 三百七拾六頁
寫真圖版 貳拾壹枚
定價 貳圓五拾錢
送料 拾四錢

本道著名の山岳・山嶽・丘陵殆んど漏らすところなく、その一々に就いて簡潔に形狀風致を紹介し、登山の時期と登山路とを夏期・冬期に分けて詳しく述べ、更に注意事項を附記して必要の助言を與へてゐる。記述正確一讀直ちに登山者に役立つ實際知識は挿入の寫真地圖と相俟つて遺憾なく、夏山の登山家はもとより特に冬山のスキーヤーにとつて極めて便利な好著である。敢へて諸彦の清鑑を仰ぐ。

振替小楨一〇三〇八番
電話 四五六三番

晴 林 堂

札幌市 幌西四十條南
目丁七

◆「スキー」を研究せられる人、登山に興味を
持たれる方が一人でも多くお読み下さることを
御願ひいたします。

◆「山岳」と「スキー」に関する御寄稿と寫眞
の御惠送をお願ひします。

原稿紙は御申越次第お送り致します

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一
字下けること。

定 價

一 部 金 參 拾 錢
六 部 金 一 圓 八 十 錢
十 二 部 金 參 圓 六 十 錢

*前金御申込か、現金でなければお送りいた
しません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

昭和六年九月十五日印刷
昭和六年九月二十日發行

編輯者 長 野 寬

印刷兼 發行者 長 野 寬

北海道札幌市北一條西二丁目
印刷所 札幌印刷株式會社

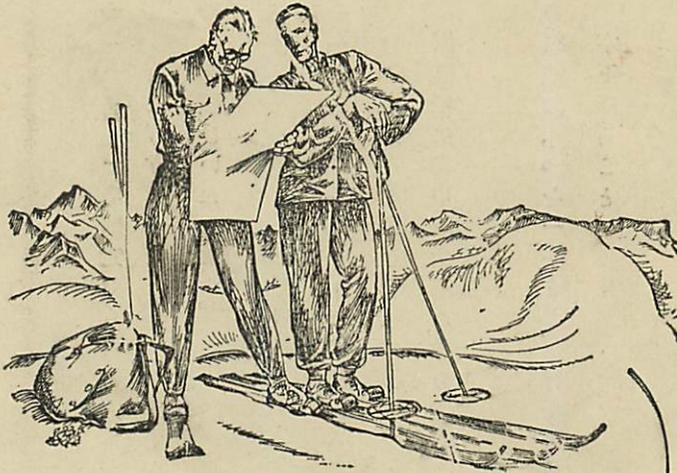
北海道札幌市北二條西十三丁目
發行所 山と雪の會

振替口座水樽八四九五番

昭和六年九月十五日
 昭和六年九月二十日
 印刷納本
 發行

山と雪

第八號



アールベグ・スキー及び冬山の道具！
 (純正ヒッコリー材・ロックバーチ材メープル材)
 ビッケル、EDELWEISS印
 (鋼鐵手打製 24.27 $\frac{1}{2}$ ・30.33 $\frac{1}{2}$ cm 保證付)
 ルックサック (スイス製布地、絶對防水)
 スタィガイセン (鋼鐵手打製八本瓜其他)
 燃料META及びアルミ炊事具各種
 羽毛製シュラフザック及び冬期露營用具

Arlberg-Ski



Hannes Schneider

(商標登録)

三越・伊東屋・白木・野澤屋

合名會社

美満津商店

東京・本郷・赤門前

定價金三十錢